

Ⅲ 講演記録

編集の都合上、本誌では資料をモノクロで掲載しておりますので、カラー版の資料につきましては、熊本市都市政策研究所のホームページをご参照いただきますようお願いいたします。

(事務局)

第22回講演会

日時：平成30年5月24日（木）15：00～17：00 会場：熊本市民会館シアーズホーム夢ホール大会議室

『ラグビーワールドカップ2019、

2020 東京オリンピック・パラリンピックと熊本の地域活性化』

上智大学文学部保健体育研究室 教授 師岡 文男 氏

<講師プロフィール>

筑波大学大学院体育研究科修了後、上智大学文学部保健体育研究室助手、講師、助教授、イリノイ大学レジャー研究学科客員教授を経て、2000年より現職。

専門はオリンピック研究、生涯スポーツ学、レジャー・レクリエーション学等。

第二のオリンピックとも言われる、IOC後援の非五輪種目の国際総合競技大会ワールドゲームズを主催する国際ワールドゲームズ協会の日本人初の理事を務め、日本招致に成功。

2007-11年 全五輪競技団体はじめ93の国際競技団体が加盟するGAISF国際スポーツ団体連合理事を務める。

はじめに

皆さんこんにちは。本日は演題に「ラグビーワールドカップ2019、2020 東京オリンピック・パラリンピックと熊本の地域活性化」を掲げておりますが、考えてみますと、熊本では世界女子ハンドボール選手権大会を抜きにスポーツは語れませんので、ハンドボールの話も交えつつ、お話をさせていただきます。

現在、国（スポーツ庁）は、「第2期スポーツ基本計画」を策定し、ラグビーワールドカップ2019、2020 東京オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲームズ2021 関西と3年続く国際メガ・スポーツイベントで日本を変えていこうという施策を推進しています。この「スポーツ立国戦略」は、地域経済の活性化だけでなく、自分のライフスタイルにスポーツを取り入れることで、健康になり医療費が下がったり、地域との関わりを持つことができたりという、スポーツによるコミュニティ改革をはかっていくことをねらったものです。

この施策を地域がどう受け止め、どう活かすかが今後重要になっていきます。そこで本日は、地域を変える「よそ者、若者、ばか者」の視点から、と言っても私はもはや若者ではありませんが、「よそ者、ばか者」としてスポーツイベントを活かした、熊本の地域活性化についてお話しさせていただきたいと思います。

熊本市都市政策研究所講演 2018.5.24

国際メガ・スポーツイベントと熊本の地域活性化

国際スポーツ界の今

GAISF国際スポーツ団体連合理事
IWGA国際ワールドゲームズ協会理事・JOC総務委員
ラグビーワールドカップ2019組織委員会顧問
ワールドマスターズゲームズ2021関西組織委員会委員
師岡 文男(上智大学教授)

スポーツとは

スライドに私の自己紹介として肩書が並んでおり、一番上に GAISF 国際スポーツ団体連合（Global Association of International Sports Federation）元理事とあります。この GAISF という団体の事をご存じの方は少ないと思いますが、五輪競技と、IOC が承認する非五輪競技の国際連盟で構成されています。IOC 承認競技というのは、例えば、2020 年東京オリンピックの追加競技である野球・ソフトボール、空手、サーフィン、スポーツクライミング、スケートボードなどであり、さらにそれだけでなく、チェス（西洋将棋）やブリッジ（トランプ競技）まで含まれています。「チェスやトランプはスポーツなの？」と疑問に思った方も多いと思いますが、スポーツの定義を辞書で調べてみると、まずは「運動競技」ですが、次に「気晴し、暇つぶし、なぐさみ、ふざける」と続きます。スポーツという単語は、紀元前 5 世紀のラテン語「deportare」（デポルターレ）に起源を

持ち、「自分の自由な時間に別の事をする」「心と体を非日常に持っていく」といった意味をもち、レクリエーションと同義語と言えます。スポーツも本来、音楽と同じように誰でもが生涯楽しめるものですし、そのような文化として生まれてきたものなのです。

ところが日本では、「年寄りの冷や水」という言葉に象徴されるように、スポーツは若い時に行うものといった風潮があります。その背景には、「競い合う競技としてのスポーツ」と「楽しむ文化としてのスポーツ」の両面を持った西洋流のスポーツの在り方が日本にもたらされた明治期は、富国強兵の時代であり、第 1 次産業全盛の時代でもあったことから、スポーツは「楽しみ」ではなく、「鍛錬」のための手段と位置づけたことで、広く受け入れられた経緯があります。

この過程で、「人生を楽しむ、教養としてのスポーツ」は学校体育の中から抜け落ちていってしまったのですが、今や「楽しむためのスポーツ」は現代の超高齢社会を生き抜く切り札になってきています。なぜならば、増大する医療費の削減効果が見込めるからです。日頃スポーツをしている人の方が医療費が低くなるのが統計上明らかになっており、今、いくつかの自治体では、インセンティブ付き健康ポイント制度として、歩いた歩数に応じて様々な特典が受けられるといった施策を展開しています。鼻先にニンジンがあれば人は動くもので、実施自治体では、3 ヶ月後に医療費が下がったという事例もあります。他にも、1 年間 1 回も病院へ行かなかった場合は報奨金がでるといった制度ができれば、皆健康に留意し、頑張るのではないのでしょうか。

また、スポーツは健康増進に役立つだけでなく、コミュニティ形成にも役立ち、メンタルヘルスの増進にも効果を発揮します。

日本においては、学校を卒業するまでは、学校にグラウンド、プール、体育館などの運動施設があり、体育授業やクラブ活動もあって、世界的にもスポーツ優良国であると言えます。ところが、学校を卒業するとスポーツする機会が激減し、週に 1 度以上定期的に運動している人の割合は先進国の中でも低い数値となっています。メタボリックシンドロームという言葉は、随分浸透しましたが、学生時代までは部活などで毎日スポーツをしていた人が、就職すると一日中机に座りっぱなしとなり、仕事が終わった後も飲みに行き、あつという間に太り、高脂血症、糖尿病、高血圧といった生活習慣病を 30 代で発

症させるケースが増えていることから注意喚起のために広められた言葉です。

近年、学校卒業後もスポーツを続けてもらうためには、「本来スポーツは楽しむために生まれたもの」という人々の意識変革が必要となり、日本体育協会が日本スポーツ協会に名称変更したように、スポーツは教育のためだけに存在するのではなく、スポーツは音楽と同じように生涯楽しみとして続けていくものとして、生活習慣の中に組み込まれていく試みが行われるようになってきました。

1964 年東京オリンピックを振り返る

ここで、私がスポーツに関わるきっかけとなった 1964 年の東京オリンピックの映像を見てみましょう。この映像は、写真家であった私の父が、TV がモノクロ全盛の時代にカラーの 8 ミリフィルムで撮影、編集、ナレーションと音を入れ、開会式の 3 日後に銀座で無料上映したものです。航空自衛隊ブルーインパルスが飛行機雲で空に描いた五輪のカラー映像は、記録するメディアが高価だったため NHK は消去してしまい、現在、父が撮影したこの映画と市川昆監督の記録映画にしか残っておらず、大変貴重な映像といえます。当時私は 10 歳、小学校 5 年生でしたが、閉会式で日本の旗手が、国を越えて入り混じって入場してきた外国人選手たちが作った騎馬の上に乗せられたシーンを見た時、敗戦から 19 年がたち、やっと国際社会の一員として認められたのだと実感し、涙が出たのを覚えています。

1964 年までは、一般の日本人はパスポートを申請できず、今のように海外に行ける時代ではありませんでした。92 カ国の外国人選手が来日したオリンピックは、正に日本の国際化がスタートした「第 2 の開国」といえる出来事でした。

また、オリンピックは大衆のファッションにも大きな影響を与えました。赤いジャケットに白いパンツという日本選手団のユニフォームや各国の色鮮やかなユニフォームは、日本人に大きなインパクトを与え、これを契機に、違う色のジャケットとパンツを合わせるスタイルが流行ったのです。

さらに、水につけても消えない聖火トーチの開発、テレビの世界同時衛星中継、瞬時に記録を掲示するオンラインシステム、同時に何種類もの料理を提供するための冷凍食品、レトルト食品の発明などの技術革新や、日本

武道館や代々木第 1・第 2 体育館などの施設、新幹線や幹線道路の整備もオリンピックを契機に行われました。

オリンピック・パラリンピックの歴史

19 世紀末、フランスのクーベルタン男爵の提唱により始まった近代オリンピックは、もちろんスポーツの祭典ですが、文化の祭典でもありました。一時期は、芸術競技として文学などの種目も設けられていました。

パラリンピックは 1960 年のローマから始まりますが、当初は正式名称「ストーク・マンデビル国際大会」というロンドンのリハビリ病院の大会を世界的にしたもので、車椅子の人だけが参加するものでした。パラリンピックのパラは、パラプレジア（下半身麻痺を表す）からきているように、足が不自由な人のみを対象としたものでした。1964 年の東京大会では、車椅子に限定すると、全ての障がい者の大会とは言えないとし、日本のパラリンピックの父の異名をもつ大分の医師中村裕氏の尽力により、第 2 部としてすべての障がい者が参加できる大会、オリンピックと並行（パラレル）して行われる大会が初めて実施されました。

オリンピック・パラリンピック・ワールドマスタースゲームズを通して世界に何を訴えるか

1964 年のオリンピックでは、「敗戦からの復興、国際社会への復帰、アジアの国際化」といった旗印を掲げ、例えば聖火リレーでは、返還前の沖縄からスタートし、最後は原爆が投下された日に広島で生まれた酒井義則さんが聖火台に火をつけることで、その理念を体現してみせました。

2020 年のオリンピックは 7 月 24 日に開会し、8 月 6 日の広島原爆の日を経て、8 月 9 日の長崎原爆の日に閉会式を迎えます。この重要な日に、閉会式で日本が何を発信するかがとても大事になってくるでしょう。そして組織委員会では、オリンピックの開閉会式とパラリンピックの開閉会式の 4 つを、起・承・転・結をテーマにつなぎ、オリンピックの開会式ではじまりパラリンピックの閉会式で完結する一つのストーリーとして、構成しようとしています。

オリンピックとパラリンピックは、東京だけのイベントではありません。例えば聖火リレーは熊本も通ります。そのルートをどう設定するか、どのようなテーマ性を持

たせるのか、例えば復興途中の熊本城を見せるのか、何をどう見せるのかが大事になっていきます。

そして 2020 年のオリンピックも復興五輪をテーマに掲げています。東日本大震災からの復興、それからもちろん熊本地震からの復興など日本が体験した様々な災害からの復興が大きなテーマとなっています。いまだ復興途中ではありますが、皆が一致団結し、希望を持ち、喜び、共に感動することは明日を切り開くパワーになることは間違いありません。そんな力をもっているのがスポーツなのです。

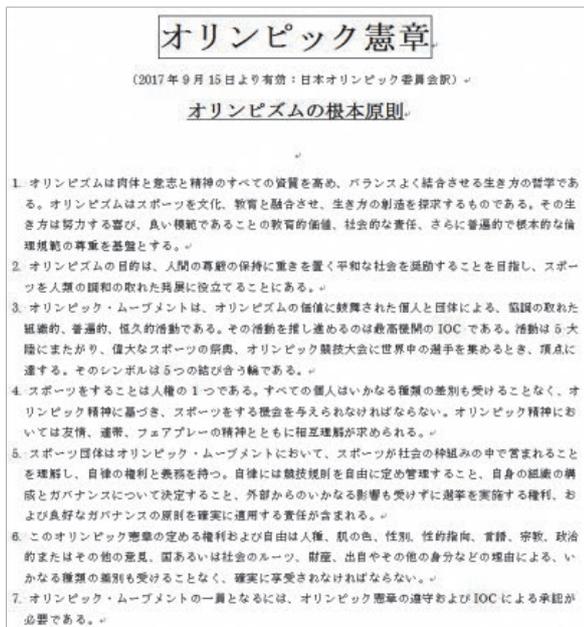
ワールドマスタースゲームズとは

ワールドマスタースゲームズは 30 歳以上であれば、参加費を払えば上手であろうと下手であろうと、誰でも参加できる夏五輪の翌年に開催される生涯スポーツの国際大会です。複数の種目に参加することも可能で、さながら総合運動会のような、生涯スポーツの文化を根付かせるための国際競技大会なのです。誰もが参加できるオープンな大会ですが、そこでの記録は世界記録にも公認される正式なものでもあります。

次の関西大会は選手 5 万人規模の大会となり、開催地を訪れるのは参加選手だけでなく、その家族や関係者なども含まれ、5 万人×3 倍、4 倍の人が来て、「泊まって、食べて、お土産を買って、観光して」と、お金を落としてくれる、そういった経済効果の大きい大会が 2021 年に関西広域で開催されるのです。

ゴールドenspports イヤーズ

日本では、2019 年のラグビーワールドカップ、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック、そして 2021 年の関西ワールドマスタースゲームズと、3 年間連続して大きな国際スポーツ大会が開かれます。この 3 年間を「ゴールドenspports イヤーズ」と呼び、この 3 年を、日本が直面する少子高齢化に伴う、地方の過疎化と産業の衰退といった課題を解決する機会にしたいと考えられています。



実は、これら 3 つの大会が、3 年連続して同一国で開催されるのは日本が初めての事です。2024 年のパリや 2028 年のロスアンゼルスでのオリンピック・パラリンピックの翌年に、日本と同様にワールドマスターズゲームズを開催することが決定しており、パリではラグビー・オリパラ・マスターズと日本と同じく 3 大会が連続して開催されることになりました。この方式は今後のスタンダードとなって行くことでしょう。なぜこのように、IOC がオリンピック・パラリンピックとワールドマスターズゲームズをセットとして考えたかという、オリンピック憲章には、「スポーツをすることは人権の 1 つ」と記されていて、スポーツはアスリートだけのものではなく、“Sports for All” すべての人に、差別なく、障がい者も健常者も、おじいちゃんもおばあちゃんも子ども、皆がスポーツを楽しめる社会を作り、お互いを知り、戦争をなくす、そんな理想郷をつくらう！という大目標が謳われています。誰もが参加できるワールドマスターズゲームズはまさに“Sports for All”社会なのです。正に共に生きる“共生社会”なのです。

皆さん、まだご記憶に新しいかと思いますが、両手が使えないリオデジャネイロ・パラリンピックの卓球選手イブラヒム・ハムム氏はラケットを口にくわえて足でボールをあげてサーブをしていました。あの姿に人間の可能性の凄さを感じ、自分はまだまだ努力していない、諦めず努力を重ねれば不可能が可能になるのではないかと、という気持ちになったのではないのでしょうか。

2014 年のソチ・パラリンピックの開会式では、「impossible」の巨大な英文字サインに「I」が付け加えられて「I'm possible」に変わる演出がなされ、人間は努力すれば、不可能を可能にすることができるんだというメッセージが発信されました。これまで、障がい者をできない人として区分けしていましたが、残された機能がいっぱいあるわけです。残された機能でできる競技を考えて行えばよいのです。例えば、皆さんのご家族に障がいを持ったお子さんや、高齢のおじいさんやおばあさんがいらしたら、その方に合わせて一緒に楽しめるルールでスポーツやゲームをしたり、遊んだりできるので。この家庭では当たり前に行っていることを一般社会でも実行していくと、今まさに国が目標としている共生社会（違いを認め合い、一緒に楽しむインクルーシブな社会）の実現につながるのではないのでしょうか。

今、日本のスポーツ界は日本大学のアメフト危険タックル事件の話題でもちきりですが、怪我をさせても勝てばよいという理論が成立してしまうと、それはスポーツではなく、喧嘩であり、戦争です。平和な社会へはつながりません。

音楽でもスポーツでも、スペシャリストには血のにじむような努力が必要とされるでしょうが、多くの人にとっては、皆で一緒になって楽しむ、共通の話題となるような関わり方が大事なのです。

スポーツの国際組織との関わり

私は 39 年前、上智大学に一般体育の教員として赴任しました。最初の年、必修体育実技としてバレーボールを担当しましたが、小中高で上手くプレーできないなどでバレーボールが嫌いになっている学生と大好きな学生が混在していて、レベルの設定に苦労しました。また、週に 1 度の授業では技術を伸ばすことも難しく、学生も、教員とも欲求不満になってしまいました。そんな時、本屋でフリスビー（フライングディスク）の専門書に出会いました。それまで犬が啜るものといった程度の認識しかなく、アメリカでは 8 万人の観客をスタジアムに集めて世界選手権が開催されていることを知り衝撃を受けました。早速、授業に取り入れてみると、今までバレーには興味を示さなかった学生たちも、「これならできるかもしれない。」と前向きに参加してくれましたし、「これはスポーツなの？」と戸惑いのあった学生も、参加してみると、ボールとは違う飛び方でゲーム性もあり

面白く、気付くとみな夢中で、「来週もフライングディスクがしたい。」と多くの学生から声があがりました。学生が「面白そう」と感じただけでこんなに受講態度が変わることを知りました。無理やりバレーボールをさせるよりも、ディスク（円盤）1枚と平らな場所があれば出来るフライングディスクは生涯スポーツにもつながると、上司を説得し、翌年からは、週8コマの授業すべてをフライングディスクに変更しました。

するとすぐにチームができ、サークルが創立されました。チームができたならメジャーにしなければと、協会の理事になり、文部科学大臣杯を戴く全日本選手権大会を開催できるようにしました。次はオリンピックだと思いましたが、オリンピック競技にはそう簡単にはなれないので、IOCが後援する非五輪種目の国際競技大会であるワールドゲームズへの参画を目指して、当時モナコで開催されていた国際スポーツ団体総連合（GAISF）と国際ワールドゲームズ協会（IWGA）の総会に交渉に行きました。そこで気付いたのは、各競技の協会の会長や事務局長に日本人がほとんどいないことです。そのため、日本人が勝つとルールが変えられてしまうといったことが、度々起こるのだなと腑に落ちました。私が参加した1994年は、参加者に日本人は私1人だけでしたが、ワールドゲームズはアジアでの開催がまだなかったので、日本で開催できないかと打診され、2001年の秋田大会開催へとつながりました。ワールドゲームズはほとんど知られていませんでしたが、IOC会長も参加するとのことでNHKの毎日の放送を始めとする各種報道や、文部科学大臣、JOC会長、日本体育協会会長の開会式出席など、スポーツはオリンピックだけではなく、様々な選択肢があることを、日本で周知するよい機会にもなりました。私自身も朝日新聞と毎日新聞の「このひと」欄で取り上げられ、スポーツの世界の幅広さをアピールすることができました。

その後も毎年情報収集のため、GAISFとIWGAの総会に世界フライングディスク協会理事として参加を続け、両団体の理事に日本人で初めて選出されました。その際築いた人間関係を活かし、オリンピックの招致活動にも協力しました。

今は、国際体操連盟の会長に渡辺氏が日本人で初就任し、国際トライアスロン連盟副会長に大塚氏が、さらに国際水泳連盟の理事にスポーツ庁長官の鈴木氏が選ばれ

るなど、日本人が国際競技団体での存在感を示すようになりました。

スポーツの力

みなさんがあまり知らない国際スポーツはまだまだ沢山あり、それらの世界選手権大会を熊本に誘致できる可能性があるということです。今後、ハンドボールやラグビーの世界大会開催で成功を収めることで、熊本は安心して国際スポーツ大会を開催できる場所であると周知できるのです。スポーツツーリズムで熊本が有名になると、さらに様々なスポーツの世界大会の誘致が可能になります。結果、多くの人々が熊本を訪れ、お金を使い、熊本の魅力に触れる。すると観光地としての熊本の魅力も広まり、さらに多くの人々を呼び込むことができるでしょう。

では、どのようなスポーツがあるのか、国際スポーツ団体連盟（GAISF）に加盟している競技団体を紹介しましょう。

International Federations (IF) 国際スポーツ連盟
ASOIF (Association of Summer Olympic International Federations) Members オリンピック夏季大会競技連盟連合(28)
AIOWF (Association of International Olympic Winter Sports Federations) Members オリンピック冬季大会競技連盟連合(7)
ARISF (Association of IOC Recognized International Sports Federations) 国際オリンピック委員会承認国際競技団体連盟(38)
AIMS (Alliance of Independent Members of Sports) 国際オリンピック委員会非承認国際競技団体連盟(20)

夏季オリンピックの競技団体が28団体、冬季が7団体、IOCの承認競技団体が38団体、その他が20団体、計93団体あります。2020年東京夏季オリンピックの追加競技の中には、スケートボードやスポーツクライミングといったアーバンゲームズ（都会型スポーツ）やサーフィンのようなビーチスポーツ（海と砂浜を使ったスポーツ）といった新しいタイプのスポーツが含まれています。

ビーチスポーツの国際総合競技大会「ワールドビーチゲームズ」の第1回大会が2019年に米国サンディエゴで開催の予定となっており、島国日本にはうってつけの大会が始まろうとしています。私は、現在ワールドビーチゲームズの日本誘致も考えています。

また、IOC 承認競技団体には、曲芸飛行やパラシューティングを行うエアスポーツ、アメリカンフットボールや自動車レース、ボーリングやトランプのブリッジ、チアリーディングなども加入しています。まだまだ日本人が知らない世界大会はたくさんあるのです。

例えば、私が日本協会会長を務めるフライングディスクの世界大会を、大阪の堺で 2012 年に開催しましたが、2500 人の選手が参加し、2 億円の経済波及効果がありました。このように発展途上のニュースポーツでも、小さな町や村であっても、競技場があれば、世界の人を集めることが出来るのです。

2011 年の東日本大震災直後の 4 月、国際体操連盟が世界選手権を東京で開催しました。東京も危険なのではないかと、各国の大使館が引き上げていた時期ですが、スポーツイベントでは人を呼べるのです。参加選手も内心東京へ行くのは嫌だったと思いますが、実際に来ると、放射線量はモスクワより低いし、東京は安全だと世界中に広めるのに大きな効果がありました。

私は、日本オートキャンプ協会の副会長も務めており、2019 年、世界大会を福島で行います。福島で開催することで、世界中から福島にオートキャンパーが訪れ、福島の海産物・農産物・肉で料理をつくり食べ、泊まることで、福島の安全性を実際に理解してもらえることを期待しています。「福島もここまで復興しているんだ」ということを実体験してもらいその体験談を世界中に拡散することで、福島への観光客を世界中から呼び戻せる。そんな力をスポーツは持っているのです。

スポーツツーリズムで人を呼ぶことの最たる例は甲子園です。ご存知の全国高校野球選手権大会の開催地になっていることで、毎年多くの人が訪れお金を落としてくれます。これがスポーツツーリズムの凄いところで、奈良の大仏は 1 回見たら普通 2 度 3 度は行きません。熊本でのハンドボール世界選手権大会は 2 回目の開催であり、今後アジア選手権など、ハンドボール関連イベントを今後も招致できる可能性があります。スポーツツーリズムはリピーターがどんどん増える可能性がとても高いのです。

観光庁の試算によると、定住人口が 1 人減ると 125 万円の年間消費が失われるそうです。これは、8 人の外国人旅行者か、25 人の国内旅行者の宿泊か、80 人の日帰り旅行者のいずれかで補填できる額で、スポーツイベントの開催で充分補填できる可能性があります。スポーツイ

ベントは数日間に亘る大会がほとんどですので、宿泊が発生します。すると、飲んだり食べたり、お土産を買ったりと、様々な個人消費がついてくるのです。

スポーツイベントと地域

ラグビーワールドカップ 2019 の熊本での開催は、10/6 のフランス対トンガ戦と、10/13 のウェールズ対ウルグアイ戦の 2 試合が予定されています。この試合が盛り上がり、世界的に熊本にも注目が集まることとなりますが、1 つの鍵をにぎるのが開催地の実行委員会とボランティアの存在です。開催地の方々が大会運営での多様な体験を通して、横のネットワークを作ることが、今後また別のイベントを呼び込んだり、何かを行うときの人間関係の土台となり得るのです。

良い例が、前述の、2001 年秋田ワールドゲームズの際の青年会議所です。当初開催に秋田県知事は乗り気ではなく、青年会議所が応援してくれました。青年会議所のメンバーは様々な企業の若手で構成されていたので、当時のメンバーは現在各組織の決定権をもつ立場となっていることが多く、横でつながっていることで秋田で何かをするときは再び一致団結できる体制が整っているということなのです。

2019 年熊本で開催されるラグビーワールドカップ 2 試合も、長野オリンピック時の「1 校 1 国運動」のように、地域を 4 等分して「うちの地域は〇〇〇の文化を学び応援する」とすると、感情移入でき、地域に歓迎ムードがでできますし、皆で試合を見に行こうといったことにもなります。熊本に来る各国の国旗を熊本市内・県内の応援担当地域に飾り、来熊する代表選手がきまったら、そのひとりひとりの顔写真入りパネルを地域内に飾って作り覚えてもらうのです。また、商店街毎に応援担当地域を決めて、その国の文化、音楽、食事を軸にイベントを開催するといったアイデアも考えられます。来熊する国の選手団・観客は「我が国の国旗をあげてくれている街」として取材にくるでしょうし、「熊本ってなんて良いところだ」という話になるでしょう。こうすることで熊本で試合が開催される 4 カ国とは非常に近い関係を築けますので、他の事でも行き来が出来るきっかけとなるでしょう。これもメガイベントの大事な役割でもあります。

また、メガイベント時にはラグビー特有の裕福層の来日・来熊が見込まれます。10/6 の試合後、13 日の試合も

見たいと思ったら 1 週間熊本滞在の可能性があるので。この 1 週間に、せっかく熊本に来たから、日本にアジアに来たから、ついでに、ハワイへ、中国へ、香港へと他の国に行ってしまうれないよう、熊本の他にはない、ここでしか見れない体験できないもの、を用意し PR する必要があります。例えば熊本城の復興している現場を見せることは、今熊本でしか出来ないことですし、他にも探せばいろいろあるでしょう。そしてそれが新たな観光資源になるのです。

こういった「どうやって盛り上げるか」というグループディスカッションをすると、多くの意見が出てくると思いますので、実際に地域の方々が集まってアイデアを出し合い話し合うことを実際にあらゆる場所で実現してみると良いと思います。やらされたものではなく地域の方々が自分たちで考えたものを自分たちで実現することで、盛り上がりにも違いが出ると思います。

ラグビーの日本での認知度は、かなりばらつきがありますので、地域を巻き込むのに、聖火リレーならぬ、ラグビー発祥の地英国ラグビー校から運んできた「聖なるラグビーボールリレー」を行うのも良いかも知れません。事前に盛り上げられることを地域で積極的に取り組み、身近なものしていくことが重要です。

ハンドボールについては、前回熊本で開催された男子世界選手権時は、観客数 20 万人を超え、経済波及効果も 64 億円を記録していますので、今回はそれを上回る結果を出すことが重要です。ただし、東京では、熊本ハンドボールの情報ほとんど入ってきません。これを全国区にする為には、熊本での試合の盛り上げイベントをユニークなものにし、熊本での盛り上げりをどう全国に発信していくかを考えることが必要です。

観戦から参加、その後の広がり

スポーツへの関わりの流れとしては、まずは観戦が考えられます。ラグビーワールドカップ、オリンピック・パラリンピックを試合会場で観戦できる人は限られ、多くの人は、テレビ・インターネットで観戦することでしょう。特に 2020 年はパラリンピックの成功が重要視されており、NHK はパラリンピック放送をオリンピックと同時間とし、力を入れることとしています。他にも WOWWOW はパラリンピックのドキュメンタリー制作放送の独占契約を IPC と結ぶなど、共生社会を目指す日本の将来目標に呼応しています。

そして、観戦する大会が終わったあと、次は自分たちが参加できる大会ワールドマスターズゲームズ 2021 関西が開催されます。これはインクルーシブな大会で、健常者と一緒に障がいを持った方が伴走者付きで走ったり、102 歳の方が参加したりと、まさにオリンピック憲章が目指した Sports for All の究極の大会ともいえます。是非皆で参加しましょう。

前述したようにオリンピック憲章では、スポーツをすることは人権であると謳っています。「人間である以上、スポーツをする権利が保障されている」ことが文化国家の証であり、いかなる差別を受けることなく、平等にスポーツをする機会が与えられねばならないのです。日本のスポーツ基本法にも、「すべての人にスポーツをする権利がある」と書かれています。

IOC は今変革期に立っています。オリンピックを本当に意味のあるものにするために、ワールドゲームズやワールドマスターズゲームズと連携を結んだり、スポーツラボという市民のためのスポーツ入門プログラムの実施を推進したりと、スポーツの門戸を広く開放する意図が見られます。

他にも、先日広島で FISE (エクストリーム・スポーツ国際フェスティバル) という、BMX やスケートボード、パルクールやインラインスケートなど公園でできるようなスポーツ (アーバンスポーツ) の大会が行われました。2 日間で 7 万人を超える参加があり、入場は無料で野外コンサートのように立ち見ですが、会場に出店する屋台からのテナント料収入で黒字化するという新しい運営方式です。食べて、飲んで、いろいろなものを買ってという、都市公園でのスポーツ大会の新しい事例です。東京オリンピックでのスポーツクライミングやスケートボードは「アーバンスポーツ」の代表例です。

これからは、今までの既成概念を打ち破って自由な発想ですべての人がスポーツを楽しめる環境づくりをする、そんな時代になってきています。

オリンピック憲章を再度見てみますと、1 番最初に、「オリムピズムは生き方を創造する哲学である」と書かれています。人間どう生きたらいいかを考えるためにオリンピックをやっているということです。2 番目は「平和な社会をつくる」ため、4 番目は「スポーツをすることは人権である」とあります。6 番目は「差別をなくして平和な社会をつくる」のがオリンピックの目的であるとしていますが、そこに挙げられた「差別は、人種、

肌の色、性別、性的嗜好、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会のルーツ、財産、出自、その他の身分」とこんなにあるのです。

その他、オリンピック憲章の 57 条には、「国ごとの世界ランキングを作成してはならない」と書かれています。つまり国威発揚のためにオリンピックがあるのではないということです。ヒトラーはベルリンオリンピックを政治利用しましたが、それを繰返してはならないのです。オリンピックが、世界一を決めることが最重要な大会であるのであれば、サッカーワールドカップのように、予選会を行い、強いチームのみを集めて大会を行えばよいのです。オリンピックはそうではなく、世界中の国・地域が集まることに最も重要な意義がある世界運動会なのです。紛争中の国も、国連から経済制裁をうけている北朝鮮も、オリンピズムを遵守し、IOC に加盟しているすべての国・地域が参加できるのがオリンピックであり、そこに意味があるのです。世界中の国が集まってスポーツを通して共感し、共通体験をし、違いを知った上でお互いが共に生きる道を探るのが究極の目的なのです。

確かに日本代表選手が勝てば嬉しいですが、それは「日本が凄い」ということではないのです。勝った選手個人を褒めるべきものなのです。

オリンピックへの様々な参加の仕方

オリンピックへの関わり方は様々あります。例えば、「参画プログラム」という制度があります。日本の文化を世界に紹介するとか、オリンピック・パラリンピックについて学ぶといった公開イベントを実施する場合、認証マークを組織委員会から貰うことができます。他には、内閣官房オリパラ推進本部が推進している「ホストタウン事業」というものがあります。熊本県でも取り組みがスタートしているようですが、「共生社会ホストタウン」という新しいタイプのホストタウンプログラム募集も始まっています。また、東北 3 県が「復興ありがとうホストタウン」として、被災時に支援してくれた国を呼び、お返しをしながら交流する制度も始まっています。熊本でも大きな地震や水害がありましたので、この制度が熊本にも適用されるよう、現在検討している所です。

また、選手の事前合宿というと、大層な施設が必要なイメージがあるかもしれませんが、すべてがそうとは限りません。メダルに絡まない国や事前合宿をするお金がない発展途上国の選手であれば、立派な施設でなくとも、

日本の暑さに慣れてもらうために早めに日本に来られるように日本の各地域が事前合宿に招くことができるはずです。メダルに絡まない国でしたら普通の学校のグラウンドなどで充分であり、小さな町や村でも受け入れが可能です。例えば、為末大さんは、ブータンの陸上選手団の事前合宿を、埼玉県の山間にある寄居町に誘致しています。206 の参加国・地域の中には、事前合宿を行いたくても資金がなく諦めている国も多くあるので、そのような国を小さな町や村でも呼ぶことができれば、「日本ってなんて良い国だろう」となるでしょう。これこそ正に 2 度目の夏季五輪を開催する日本らしい「おもてなし」だと思います。

その他の取り組みとしては、日本文化を発信していく「beyond 2020」というプログラムや、「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」などがあります。みんなのメダルプロジェクトでは、使わなくなったスマートフォンやパソコンなどを回収し、そこに含まれる金属を取り出しメダルの原料にします。誰でも、家にある使わなくなったパソコンや携帯電話を回収してもらえば、メダル作成に関わることができます。そうすることでオリンピックが他人事ではなく自分事になるのです。このような仕組みもうまく利用し、日本全国で盛り上げていけると良いと思います。

他にも 1964 年の東京オリンピックの際、全国の盆踊りで使われ大ヒットした三波春夫さんの「東京五輪音頭」を今回、石川さゆりさん、加山雄三さん、竹原ピストルさんの新しいバージョン「東京五輪音頭—2020—」にリメイクして配信しています。このような取り組みも参加のひとつのきっかけになるでしょう。

振り返ると、1964 年の東京オリンピックの時代、サッカーはチケットが余るほど人気のない種目でした。しかしその後、J リーグができ、地域に根ざしたものになり、今やすっかり人気競技となっています。この J リーグがよい例ですが、一緒になって応援する快感を一度味わうと、みんな集まるようになります。するとさらにそこで知り合いができ、地域のコミュニティも生まれます。コミュニティ崩壊の時代と言われる現代ですが、共通の話題となり、共通で取組めるスポーツイベントは、これからのコミュニティの核になり得るのです。

スポーツが持っている価値や魅力を伝え、また各人がそれぞれのペースで取組むことで、自身の生活を健康に、

また幸せなものにしていただきたい。そのような
願いを込めて、本日の講演を締めくくらせて頂きます。
ご清聴頂きありがとうございました。

第 23 回講演会

日時：平成 30 年 8 月 9 日（木）15：00～17：00 会場：熊本市役所 14 階大ホール

『歴史を観る目・辿る道』

佐賀女子短期大学名誉教授 高島 忠平 氏

<講師プロフィール>

昭和 39 年熊本大学法文学部(東洋史専攻)卒業。奈良国立文化財研究所文部技官、佐賀県教育委員会勤務。文化財調査係長、吉野ヶ里遺跡保存対策室長、副教育長、佐賀女子短期大学教授、同短大学長、学校法人旭学園理事長などを歴任。永年にわたり吉野ヶ里遺跡の発掘調査・保存・活用に取り組み「ミスター吉野ヶ里」とも呼ばれる。著書に『日本通史 古代 I 吉野ヶ里』(岩波書店)、『縄文の宇宙、弥生の世界』(共著：角川書店)、『研究最前線邪馬台国』(一部執筆・編集：朝日新聞出版) など

1. 歴史とは何か



みなさんこんにちは。ただいま紹介にあずかりました高島です。紹介にありましたように、私も今から 52 年前まで熊本大学に在籍いたしまして、落第をしてしまい普通の学生よりも一年長くおりました。熊本大学には、やっとのことで入学したようであります。卒業するときも単位が足りずに何とか先生に頼み込んで辛うじて卒業しました。ただ、一年遅れたことで、奈良国立文化研究所に就職が決まりました。おそらくそれが一年早くても一年遅くても、そういう機会はなかったのですけれども、幸い就職が出来たいきさつがあります。私はつくづく自分の人生をふりかえると、行き当たりばったりというのを続けてきたようです。今日の話の中にも出てきますが、吉野ヶ里遺跡との出会いも、そうした「行き当たりばったり」が支えたものだと思います。今日は、葦茂所長から難しいテーマをいただきました。どのようなお話をしようかと実は悩んでいましたが、常々自分が考えていることを、ここで話させていただけたらと思います。「歴史を見る目、辿る道」というテーマですので、「歴史とは何か」という難しい話から入りたいと思います。イギリスの世界的な有名な歴史学者のアーノルド・トインビーは、本当はイギリスの歴史しかやって

いなかった人ですが、実際は考古学、そして大学では古代史を教えておられた方です。第 1 次大戦の世界的争乱のなかで、自分のやるべき歴史学の道というものを、改めて感じとられたようです。それが最初に書いておりますが、「われわれは歴史の中にいる」という言葉です。常に何でもなし生活の中で、みなさんも未来に向かって動く歴史の中にいる存在であることを、トインビーは自覚して、世界的な歴史学者になったわけです。日本の歴史にも深い関心を持っておられた方です。『歴史とは何か』という書物も書かれています。トインビーが歴史学をより進めることに向けた歴史に対する認識を初めにみなさんに説明させていただきました。

さて人類誕生から 500 万年といわれています。もっと古いという方もいますが、まだまだ人類発祥の謎は本当の意味では解決できていません。おそらく、みなさんも人類の最初の頃の人骨や痕跡の調査が現在の南アフリカで進められていることはマスメディア等でご周知のことかと思えます。なぜ南アフリカなのかということですが、実は人間にとって一番身近な動物がいるわけで、チンパンジーやボノボといった動物の遺伝子は、かなり人間と共有する部分が大きいわけです。ですから、人類史的にも類人猿は人類と最も近い関係にあり、こうしたチンパンジーやボノボなどの類人猿がヒトと分岐したというのは、おそらくアフリカであるというのが、現在の研究者の一致した意見です。実際に南アフリカの地域で最も古い人類の人骨が発見されて、そこを対象に人類の発祥を明らかにすべく、研究者が発掘に現在も挑んでいるということです。約 500 万年というのは本当に大雑把ですが、地球誕生の 45 億年からみると、わずかな年月であります。その間、人類は森を伐り開き、村をつくり、さらに都市をつくり、より快適な生活を求めてきたと思います。その結果、地球が深刻なダメージを受けつつあるということは、みなさんもこの夏を体験

して感じられていることであろうと思います。あるいは大きな災害が起きるのも、こうした地球の生態のバランスが大きく崩れていて、それに人類が負った役割というものもあったかと思えます。

アメリカの科学者をはじめとした様々な専門家たちが、地球にダメージを与えている人類がこの地球からいなくなったら地球はどうなるのか？それで地球は救われるのか？ということ、リアルなCGでシミュレーションしました。「人類消滅1日目」から、いろいろなことが書かれています。一つずつ、みなさんも想像していただければ分かると思います。「人類消滅1日目」から、まず訪れる変化ですが、明るかった町の灯りが突然消える、電気が止まってしまう、それがどういうことを引き起こすかということは、みなさんもよくお分かりかと思えます。原発はどうなるのか、ということはシミュレーションには入っていませんでした。原発は、ご存知のように福島原発のように放置されると、メルトダウンが起きて地球環境に壊滅的な影響を与えることが予想されますが、これがシミュレーションの中に入っていないのは疑問に思えます。多分、世界の原発が維持管理されなければメルトダウンすることは明らかで、数百はあるかと思えますが、地球環境に大変な影響を与えらると思えます。

「そして人類消滅1万年後」ですが、人間がいなくなった地球、その1万年後を想像してみたいと思います。それは、あらゆる生物が生命を謳歌し全てが自然に包まれた緑の地球。これは原発を考えなければですが、そこは、まばゆいばかりの輝かしい世界になり、地球に残された人類の痕跡は、ほんのわずかしか残っていない、ということになると思います。地球から人類がいなくなるとどうなるか？その答えは、「地球は、失っていた全ての地球を取り戻し本来の姿に戻る」というシミュレーションになっています。必ずしも、そうはいかないと思いますが、地球が自然を取り戻すということは間違いはないかと思えます。このように人間の歴史は地球に大きなダメージを与えています。では、その人間の歴史ということ、改めて考えてみたいと思えます。

2. 歴史にみる心と文化

第二部は、「歴史にみる心と文化」ということですが、導入で、3つのNHKの番組を紹介したいと思います。はじめは「地球生き物紀行」で佐賀平野のトンボとサカナをとらえたものです。トンボの生息というのが、特に佐賀平野、

あるいは地球環境の維持のために大事な存在であるということ、を訴えています。次に「クローズアップ現代」で「日本の森林が危ない」というテーマで、亡くなられた立松和平さんが出演されていました。森林の循環が必要である、雑木林が人の手が入るわけですが、ひとたび、人の手が入れば、その生態を維持していく責任がある、という番組でした。最後に「ふるさとの24時間図書館」という番組で、佐賀県唐津市で今でも農家をやりながら作家活動をされている山下惣一さんという農民作家が出演されていました。ここでは、地域の交流の場、失われていく伝統的な交流の場、そこで行われる祭りや井戸端会議や向こう三軒両隣といった地域住民のコミュニケーション活動について、その現状について触れる番組でした。

これら3つの番組から窺えるものとして、自然との共生、むしろ自然の営みとヒトの営みを融合した生態のあり方といえると思います。それから、日本列島人の生き方、信仰、世界観、里山の文化ですね。日本人には、他の国あるいは民族にはない独特の信仰、世界観、特に里山の文化というのを持っています。それから、文化の担い手、コミュニティ、集団、ヒトの社会ということで、どのようなものでも社会化されなければ文化にはならないということで、文化の担い手はコミュニティであり集団なのですが、個人が持っている限りでは文化ではなく、それが集団や社会で共有される中で初めて文化というものになっていくわけです。

難しい定義になりますが、文化とは「学問、信仰、芸術、倫理、法律、風習、そしてその他に、社会の一員として人間が身につける全ての能力と習慣からなる複合体である」ということです。文化というものは単純なものではないし、全て複合したものであり、文化というのは、私の言い方で「融通無碍」ですね。どのようにもありうる、なりうる、変化する、そういうものが文化であるといえると思います。そして、それは「ある一つの人々の集団が学習し、共有した行動様式であり、歴史という時間をかけて共有化されたヒト独自のもの」であります。ヒト独自のものというものは、人類以外には「歴史」というものは持っていません。ヒトに近いチンパンジーにしてもボノボにしても、あるいはゴリラにしても、「文化」や「歴史」というのを持っていません。ですから歴史と文化は、他の動物とは違った人間、ヒト社会が生きていく上での社会固有のプログラムである、ということでもあります。みなさんも生きていく上での計画というものがあるかと思えます。その

日、その一週間、一ヶ月、一年と生活していく上での計画というのは、どこかであると思います。いや、そんなものはないよ、とおっしゃる方もいるかもしれませんが、必ず自分のプログラムがあり、一日、一週間、一ヶ月、一年を過ごしていると思います。そうしたプログラムというものは、他の動物にはないということでもあります。

3. カルチャー・ランド・スケープ



この写真は、山影でおおよそお分かりになるかとおもいますが、雲仙岳ですね。左に、ぼつと出ているのは、眉岳(眉山)ですね。眉岳は、江戸時代に大きな噴火があったときに、地震に伴って崩壊して、その影響で津波が熊本を襲ったということです。そして、雲がたなびいていますが、手前の海に出る川は、有明海に注ぐ矢部川の河口です。お手元の資料にも私の感想が書いてありますが、九州佐賀国際空港という大仰な名前ですが、小さな飛行場があります。私から見れば、飛行場らしい飛行場ですね。ここから飛行機が上空へ昇ったり、あるいは降りてくるときに、広い空に昇っていく、あるいは広い平地に降りていく、という感じが実感できる空港であります。さて、みなさんがご存知の佐賀県から福岡県にわたっての筑紫平野は、沖積平野としては日本で最も大きい平野に類すると思います。この熊本平野も含めて広い平野になるのではないかと思います。飛行機に乗って、徐々に上空に昇っていく間、写真を撮りながら、下のほうを眺めておりました。この有明海やその周囲に広がる筑紫平野というものが、どのようなものであったのだろうか？どのようにして、このような平野ができたのか？ということを考えて時があります。

まるで見てきたように申し上げますが、8万5千年ほど前に、(7万年前という人もいますが)阿蘇山が第4回目の大爆発をしました。このとき、雲仙・普賢岳の火砕流の

約500万倍といわれる極めて大規模な火砕流が発生しました。九州全土のみならず、本州の一部も覆い尽くしたと言われる大変な大爆発が阿蘇山であったわけです。この火砕流の堆積が、筑紫平野や有明海の海底のさらの下方に分厚く堆積しています。そして、数万年前から始まった海進によって、浅い海となりました。この筑紫平野や有明海は、8万5千年前はまだ陸地、浅い谷であったといわれ、そこに火砕流が厚く堆積したわけです。それから数万年の間に、周囲の山々が侵食されて、その上に被っていきます。あるいはまた火砕流の堆積を侵食して、あちこちに、我々が「火山灰ローム層」と呼んでいる丘陵が出来上がっていきました。吉野ヶ里遺跡は火山灰の堆積層が侵食されて形成された丘陵上にあります。

氷期が終わり間氷期という時期が来ると、北極と南極の氷が解けて、海が現在より150~160メートルほど高くなったと言われています。陸地であった火砕流の堆積した浅い谷に海が入ってきて、遠浅の海が出来ました。深い西の海から寄せる海が浅い海に流れ込むことで非常に潮位差が大きい有明海が形成されたわけです。日本で最大の潮の満ち引きがあるとされ、大きい時には6メートルほどの潮の干満差があります。



これは筑後川の河口付近です。この河口付近の沖積速度、いわば陸地になっていく速度は一説では年間10メートルと言われていました。私も佐賀に赴任したとき、ある本で書かれていて、そんな10メートルもないだろうと疑問に思っていたのですが、現在の筑後川の河口から20キロメートルほど奥に貝塚が点々とあります。言い換えれば、海に近い場所がそこまであったということになります。その貝塚は、今から2000年前ほどの弥生時代のもので、そうしますと、年間10メートルに2000年をかけると20キロメートルということで、考古学的に確かめることができ、

私も納得することができたわけです。こうした沖積作用が何故起きるのかと申しますと、普通は川から流れ出した土砂が堆積し広がっていくのが堆積作用です。しかし、有明海の場合は川から流れ出した土が堆積すると同時に流出した火山灰土が浮泥となって海に浮かんでいます。それらが満ち潮とともに陸のほうに押し戻され、引き潮とともに堆積していくわけです。ですから、特に江戸時代からの佐賀平野の農地造成、干拓の状況を見てみますと、海岸に沿って扇状に、搦（からみ）という地名が点々と帯状に残っています。これは何かというと、木の枝や葉をそこに置いて、満ち潮で戻された土がそこに引っかかって堆積していくわけで、自然の摂理を利用した干拓事業が行われていたわけです。佐賀藩は、額面 35 万石の大名でしたが、実質は 80 万石あったとも言われています。現在は、写真には写っておりませんが、海岸近くには海苔ひびの網等をたくさん見ることができます。これも遠浅の海を利用して、また川から流れ出す養分を利用した海苔栽培が行われているわけです。この平野を見ていくと、まさにこの地域は基盤目のように走る水田がありますが、長い歴史の中で人と自然との関係で作りに上げた歴史的な文化景観というふうにいえると思います。それをもって、カルチャー・ランド・スケープ、これがいわば日本の基本的な文化を生み出した大きな力であったことが分かります。

雲仙岳は、佐賀県から福岡県の筑紫平野の人たちにとっては、自分たちの生活の場所を知るランドマークであります。この方向に雲仙岳があるということは自分たちが住んでいる場所を認識するという話をあるところでしましたら、熊本からも見えますと言われ、なるほどと思いました。有明海は不知火海を抜けて外海にも出るわけですが交通の要所でもあります。

象徴的な土地の言葉として、柳川出身の北原白秋という有名な詩人が、韓国の詩人たちが民謡集（『朝鮮民謡選』）を出版したときに、巻頭に序文を書いています。それを読むと「自分は柳川出身なので東京よりも朝鮮（韓）をより身近に感じていた。柳川には、鮫鱈組という漁労集団があって、春と秋には小船を操って、五島列島を経て、現在の韓国の釜山に稼ぎに行っていた」と書いてあります。有明海から大陸や韓国に行くには、玄界灘を経て回り込んで行くような地域にみえますが、決してそうではなく、潮の干満の大きさを利用するなどして水運が非常に盛んであったわけです。



この写真は、有明海と筑紫平野の写真ですが、約 3000 年前から沖積作用が急速に進んできたタイミングと合わせたかのように、2500 年前から大陸から稲作の技術が伝わり、この地は日本農耕社会の揺籃の地となります。同時に在来人と渡来人が出会い、熊本平野や有明海の近い地域では初期の稲作の遺跡が見つかっています。また、有明海周辺の地域では、朝鮮半島から渡ってきた人たちが村を作って、稲作を広めていった状況も確認されています。そういうことでは、内海的な有明海、不知火海ではありますが、閉鎖的ではなくて、対外的な交流を大きく持っていた場所であったわけです。



見ていただければわかるかと思いますが、有明海、不知火海で、雲仙岳があり、筑紫平野や熊本平野からも良く見えます。背振山もあります。最近、宗像、沖ノ島、関連遺産群が世界遺産になって有名になり、みなさんもご存知かと思いますが、これらの海に祀られている神様がこの背振山の上に祀られています。特に大陸から航海して、こちらにやってくるときに、その目標が背振山でありました。航海は目標・目的があって進むもので漂流とは違い、おそらく大陸からちゃんとした航海の目的をもってやってきて

いたかと思いますが、この背振山が一番の目標にして、唐津や博多に帆船で到着したわけです。かつて日本丸の帆船の船長をされた方が、パリから帆船でやってきたときにまず目に付くのは背振山だと言っておりました。そういうことから見ても、これらの地域、有明海周辺も共有しながら、筑紫の国があるということが地図で分かるかと思います。



佐賀県の上峰町でびっくりするような発見がありました。この写真は縦の木の種類ですが、木材は直径2mほどあります。赤っぽい土が火砕流の堆積です。遺跡の発掘調査をしてところ、腐っていない生木が出てきました。発見当時、私も一緒にいましたが、幸い地下水の性質で残ったのだと思いますが、8万5千万年前に火砕流でなぎ倒された直径2mの縦の木です。この時に熊本大学の火山学者の方に調査してもらい、この木についている火砕流の傷から、この地域に、100km/hほどの火砕流が、しかも東の方から襲って来たということが分かりました。阿蘇山の方角は南ですので、何処から来たのかということになったのですが、一度、北のほう流れた火砕流が途中で西に方向を変えて襲ったということが分かりました。普賢岳の火砕流の約500万倍といわれても実感がわきませんが、米粒に例えますと、米500万粒というのは80kgの俵になります。米1粒を1メートルの上から頭に落としても、感じるのがやっとくらいかもしれませんが、80kgの俵を落としたりどうでしょうか。それだけ大変なエネルギーの火砕流が襲ったわけです。そして、この火砕流が先ほど申し上げたように、有明海という特異な環境を作り出したわけです。そこに営み、歴史を作った人たちがいて、形成されたのが、現在の歴史的文化景観といわれるものだと思います。

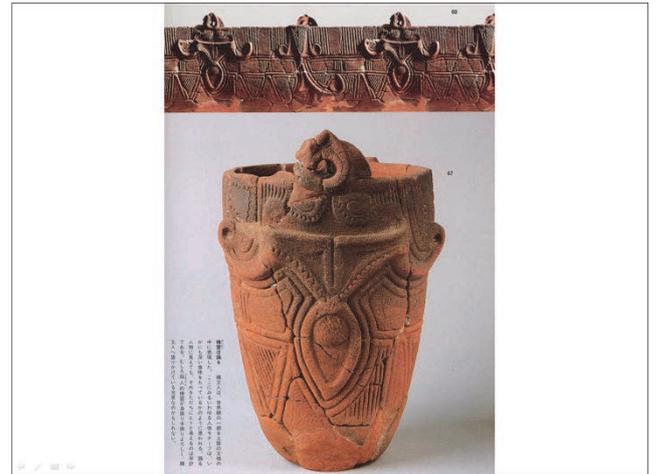
4. 環境と世界観

環境と世界観についてですが、環境から世界観が生まれてきます。信仰といってもいいかもしれません。環境には、地球の自然環境、そして人類が自然と関わりを持ちながら、生活を営む中で形成してきた生活環境、というものがある。この2つを考えておく必要があります。何も自然だけが環境を決定するのではなくて、人が関わりながら作ってきた環境もあります。これは日本の場合は、里山、里海というものであります。環境は同時に人の心をつくるものであります。自然と一体となって生活してきた人たちの心、世界観、信仰というものは、日本人の重要な精神構造の基礎的なものをつくっています。これは、自然と対決して文化をつくってきたヨーロッパと対比させられます。日本人の心、精神世界、世界観は、自然を「神」にする、あるいは自然に「靈魂」がある、靈的な力があると感じるものです。これは今日も日本人の精神構造の中に根強く残っています。これは必ずしもそうした例といえないかもしれませんが、野球選手が付けている首輪のような磁気バンドに、ピッチャーが投球する時にキスをしたり、バッターがバッターボックスに立つ時にキスをしたりしますが、自分に超自然的な力を与えられるという信仰があると思います。こうした信仰は、みなさまの中にもたくさんあると思います。たとえば、山の神様とか風の神様とか我々の世界には神様が満ち溢れている。そういうものと一体となって我々は生活をしているという感覚であります。そういうものを含めた環境、自然と一緒に作り上げてきた生活環境、これが歴史的産物であります。

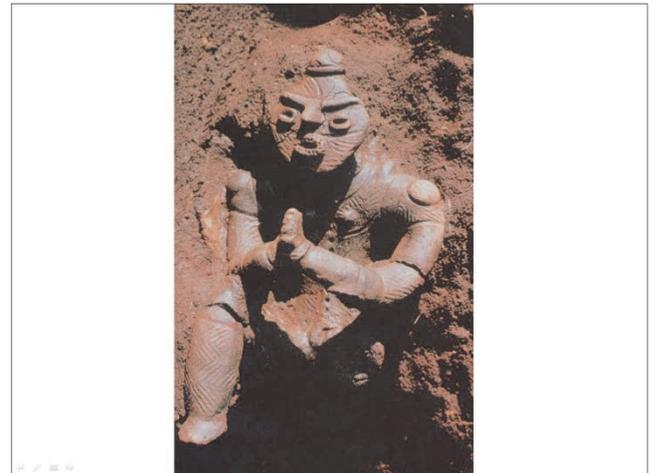
そこで我々の祖先というものを振り返ってみたいのですが、縄文人の世界観、これは精霊信仰が主体であります。精霊信仰というのは、万物に神々が宿るということであります。どのようなものにも、お箸にも茶碗にも草や川にも色々なものに神が存在する。それを時々、擬人化、人間のように位置付けることがあります。それが発達して、いろいろな神様になるわけです。そういうことでは精霊信仰というのは、日本人の根源的な精神、あるいは信仰であるといえると思います。縄文時代は、集落の中央の広場に墓を営んでいます。死者との共生と再生を祈るということで、中央のお祭りの広場に遺体を埋めております。それはどういうことかといいますと、東洋的と言ってもいいと思いますが、「魂魄(こんぱく)」という言葉があるのをみなさんもご存知かと思います。「魂」と「魄」ということで、これは一つのものではなく、二つの「たましい」を持ってい

ます。「魂」というたましいは、生きているときは「生」を司り、「魄」は「肉体」を司る。2つの「魂魄」があるというふうに認識しています。これはアジア人に共通ですが、日本人は特に強く意識していることです。ですから、人間は亡くなると、「魂」は来世に行く一方で、「魄」は死霊となって地上にとどまる、いわば遺体であります。しかし、その死霊は大事にしないと祟るので、自分たちの村の中央の広場に埋めて、常に「魄」と一緒に暮らすという村づくりをしたわけです。そして、時折、呼び返すこともするわけです。そろそろお盆ですが、呼べばやってくる。それにはいろいろな祭祀、儀式などがありますが、日本の神様というのは便利に出来ています。姿は見せないけど呼べばいつでもやってきてくれる、誰が呼んでも来てくれます。今は神主さんがその役目を果たしているわけですが、そういう神が、我々日本人の心の世界に存在しています。死霊に対する恐れと信仰、お墓を作って大事にするというのも、大事にしないと死霊が祟ってくるわけです。たとえば、菅原道真は怨霊となって祟ったわけです。大宰府天満宮に祀られているわけですが、他に怨霊の祟りを恐れて、神代(神社)がつくられることがあります。これが発展して、江戸時代くらいになると、怨霊は幽霊として変化してくるわけです。遺体を大事にするということはヨーロッパにはあまりありません。

それから、自然の社会化ということで、草や木も太陽も東西南北、日が昇る方向にもいろいろな神々がいるということです。黄色人種にルーツをもつ人に似通ったところがあります。私は、ネイティブ・アメリカンの人たちの住居に訪問したことがあります。ほとんどの人は町に住んでいましたが、一部の人は、我々からみれば荒野と思われるところに家を作って住んでいました。ジョン・ウェインの「駅馬車」の舞台になるようなところなんです。なぜそのようなところに住んでいるのかというと、あちこちに自分たちの精霊がいるということで、その精霊と自分たちが一緒に住むことで精神的にも一番安定して生活が出来るということでした。そこで獲れるものはトウモロコシくらいのものだと思います。雨は降らないということでしたが、家の屋根の上には神々との交信をするために穴が開いていました。東は神様がやってくる事が出来るように入り口として設けていました。最近ではアメリカという悪い精霊がやってくると言っていますが、このように自然の神々を自分の社会の中に位置付けていくという世界は、縄文人が始めたことです。



いろいろな精霊があるかと思いますが、この写真は、人のような形をしています。多分精霊でしょう。精霊が土器のまわりに表現されています。ぐるりと周りに人物のような精霊が表現されています。精霊に守られている、あるいは精霊が寄り付く甕です。



この時期にはこのように座って、祈りのようなものを捧げる。女性ですから巫女さんですね。神の子、シャーマンです。こういう座り方は、皆さん、できなくなった人もいるかもしれませんが「しゃがみ座り」ですね。こういうしゃがみ方は、ヨーロッパ人にはできません。野球のメジャーリーグでも、キャッチャーがここまでお尻を落としません。日本人のキャッチャーはお尻を地面まで落とします。この座り方は「しゃがむ」としか表現できませんが、一時はコンビニの前でこういう若者がいましたが(会場笑)、この座り方は南のほうから島伝いで来たものだと考えられています。そういうところの椅子は低い椅子ですね。枕より低いです。高い椅子が出てくるとするのは権力の出現と関係があります。



この写真は、日本列島の原植生と主な動物の分布を表したのですが、この写真で日本列島を見たときに、大きく生態が東日本と西日本で分かれています。最近では温暖化で変わってきましたが、西日本は昼も暗い常緑広葉樹で、東日本はブナ林などの明るい林で、植生だけでなく、東にはイノシシがいないなど住む動物も違います。それらを捕らえ、あるいは採集して食べる食文化にも違いがありました。

佐賀市の遺跡の例ですが、8000～9000 年くらい前の住居、お墓、ごみ捨て場、それからドングリなどを晒して食べられるようにする遺跡が出てきました。現在の地表から 5メートルくらい下のものです。ここに大きな調整池ができるということで掘り下げて、初めて分かったのですが、クヌギ、イチイ、カシの木の木のさし場や貯蔵施設も出てきました。現在の有明海で採れる貝も出ており、動物、川魚、海魚も食べていました。鹿の髄も食べていた様です。焼石で料理をしていた可能性も考えられています。潟に近い場所に集落を形成しまして、その背後には雑木林があります。既に 9000 年前から里山・海里的な生活環境を形成していたことがこの遺跡でわかりました。

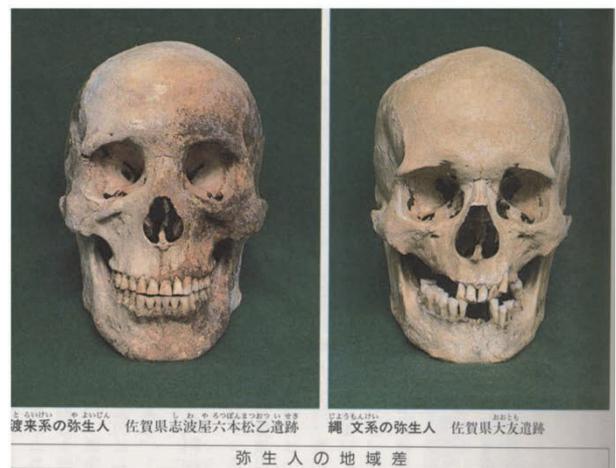
ところが 2500 年前くらいに稲作が入ってきました。そうしますと、農業を背景にした世界観が入り込み、稲作の渡来とともに穀霊、作物に対する信仰が新たに成立してきました。それから世代を渡って農業を営んでいくことで、新たな祖霊信仰が生まれてきました。そして、祖霊信仰は、国、政治社会の成立とあいまって、支配的な思想となって行きました。

祖霊信仰というのは、父方か母方かは別として、特定の先行する世代の死者が系譜的に現世民に連なり、現世民の生活に強い影響を及ぼす観念のことをいいます。このあたりの時代から先祖への敬いが強くなってきます。たとえば、その国を作った祖先が社会的に大きく祀られるというこ

とで、その祀りに集まった人たちが集団をつくり、その集団を支配していく秩序・制度が作られていきました。



この写真は、その弥生時代の巫女さんです。熊本県でもたくさん出土しています。貝の腕輪を二十数本付けていますが、これは沖縄でしかとれないゴホウラ・イモ貝ですが、これをたくさん身につけて、貝の呪力を用いて、憑依、トランスして、神々から神託を得るわけです。紀元前 2 世紀頃は、巫女はまだ一般の墓に入っていました。多くの巫女が身分の高い人たちの墓に葬られるようになっていきました。こういう人たちが徐々に地位を高めていく様子が分かります。巫女の社会的地位が上がってきたのが紀元前 1 世紀のことであります。それからどんどんと権威、力をつけてきて、ここで邪馬台国論をするつもりはありませんが、卑弥呼のような巫女(ふじょ)王、あるいはシャーマンの王が出現してくるわけです。その過程が、九州では的確に読み取ることが出来ます。



ここに二つの顔があって、われわれ流に言えば、右側の四角い顔が、西北九州型、南九州型で、同じく弥生人です。左側の面長が北部九州、福岡、佐賀、熊本地域の人の顔です。この人たちが、朝鮮半島か中国か

らの渡来系で稲作を伝えてきたのではないかと考えられています。これらのひとは、やがて4~5世紀になると在来人の中に混じっていて、その差は見られなくなります。

祖霊信仰について、吉野ヶ里環壕集落内の北位置に、歴代の王を葬った墳丘、人工的な盛り土があります。その前に社を建てて、柱を立てて、祀りをしていました。国づくりをした王が中央に埋葬されていますが、歴代の王も周りに埋葬されます。それらは死霊ですが、時々、魂に帰ってきてもらって、魂と魄が一緒になってもらう必要がありました。そこで巫女に託宣、神託を受けてもらうために、あの世に行っていた魂を呼び戻すために柱を立てました。これは今でも諏訪大社では「柱」を神様に表現しますし、靖国神社などで英霊を何柱というふうに言います。こうして、祖先、社会を統一した国作りをした人たちをおまつりするようになったのが弥生時代です。また、いろいろな稲の神様や邪霊を避けるために木の神を作って門の上に置いたりもしました。村の入口にこういうものを置いて、よそ様の悪霊や邪霊を避けるようなことも行われるようになりました。



人間のウンコの化石・糞石(奈良県唐古・鍵遺跡、弥生時代中期)

これは弥生人のうんこです。調べますと、いろいろな寄生虫の卵などが出てきます。回虫や鞭虫です。回虫は、食べ物から卵の状態で人体に入ってから寄生するわけですが、鞭虫は生魚に付いています。生魚を食べる習慣があったので、鞭虫の卵が体の中で孵って、また卵を産み、それがまた便となって出たわけです。弥生時代の人たちは、回虫にしても鞭虫にしても寄生されることで、かなりひどい貧血をおこしていた可能性があったといわれています。それから、植物性、動物性の食べ物を見ていきますと、炭素同位体比で分析すると、肉食動物、草食動物の間にヒトの分析値があるとのこと。ということは、我々日本人の祖先は、植物性、動物性の食物をバランスよく摂取して

いたことが分かります。この時期になると、交易がはじまり、日本列島だけでなく、おそらく海外からも取引に来ていたことが分かります。特に北部九州では、朝鮮半島や中国の文物がたくさん出土しています。

5. 吉野ヶ里遺跡について

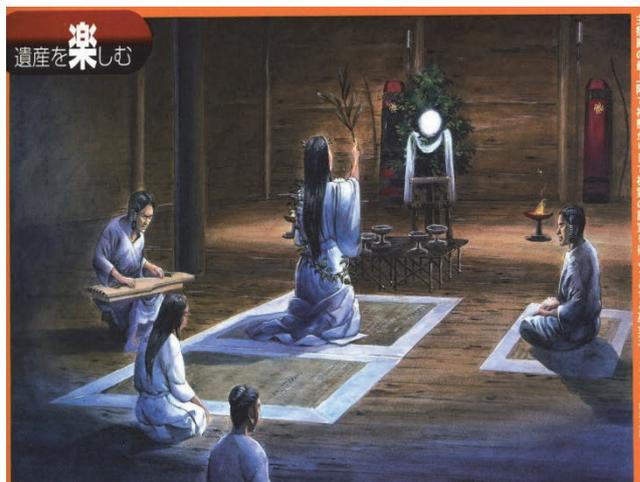
ここで発掘調査した吉野ヶ里遺跡について紹介したいと思います。長細い丘陵ですが、幅が約600から700mあり、南北が5kmほどで火砕流が堆積が丘陵として残ったものです。この上に吉野ヶ里遺跡が形成されています。約300ヘクタールほど、住居や墓、壕など、いろいろな施設や遺物がたくさん出てまいります。その南側の端のほうに約40ヘクタールほどの壕を巡らした環壕集落が出てきました。これは発掘当時の様子です。このまま残すことは今日の技術では不可能なので埋め戻してその上に当時の復元をしています。この吉野ヶ里遺跡の歴史的意義を簡単に説明すると、日本最大の環壕集落ですが、それを置いても、国の政治、経済、信仰の中核的機能をもつ都(御家拠)のあるところ。偉い人の家のことを「みや」といいます。飛鳥時代までは、ある天皇が都を遷したという都市を遷したような印象ですが、実は自分たちが住んでいる館を遷したくらいです。都市計画的な都が作られるようになったのは藤原京からで、7世紀の終り頃です。それまでは天皇の屋敷が都であったわけです。

吉野ヶ里遺跡は、列島社会が、村から国へと発展する様子を段階的に追って説明できる遺跡であるといえます。紀元前3、4世紀から紀元後3世紀まで約700年間続いていた集落遺跡です。ですから、その間にどのように変化したのかをよく読みとれる遺跡であるといえます。こうした遺跡が他にはまだ発見されていません。そういう調査がされていませので、おそらく他にもあると思われませんが、現在、吉野ヶ里遺跡が発見された唯一の例であり、村から国といった変化の様子がみることができます。そして、それが国の生成、確立、国が連合し、連合間の国の抗争を通じて、国家の生成へと向かう社会の激動を伝える遺跡であるということがいえます。そして、言い換えれば、魏志倭人伝の記述と符号する遺跡であります。

魏志倭人伝では、卑弥呼の住む館について、居所、宮室、楼観、城柵を厳重に巡らせ、常に武器を持って待っている人がいる、と書かれています。これとよく符号する各施設の配置関係が吉野ヶ里遺跡にはあります。そうしたことから、吉野ヶ里は邪馬台国ではないかという方も出てきたわ

けですけれども、このように魏志倭人伝と符合する遺跡が発見されたのは、まだ吉野ヶ里だけで、他の遺跡では発見されていません。そんな段階では邪馬台国とは断定的なことはいえません。魏志倭人伝の時代の一つの国の都の様子が明らかになったという意義は大きいと思います。このことは現在も続けられている邪馬台国論争にも大きな影響を与え続けています。私は、九州説の旗頭に無理やりさせられています、何か奈良の方で発見があると、新聞社やテレビがコメントを求めてきます。そろそろ屈服しませんかというわけです。屈服したくても、中々それだけの発見ではないのではないかという話で押し返します。ある奈良に住んでいた先輩からは「邪馬台国九州説絶滅危惧種」と言われたりしましたが、最近では絶滅危惧種には保護の手が加わってまた新たに再生しつつあります、と返しています。まだまだこれは決着が付きませんが、具体的な遺跡の上で議論されるようになった意義は大きいものがあると思います。

吉野ヶ里遺跡で注目すべきは、当時の人たちの世界観の一部であります。ここに図面を出していますが、これが壕の跡です。実際は壕がずっとあって、まだ発掘されていませんが、その中に二重の壕で囲まれた地域があり、他にもいろいろな施設、歴代の王の墓、祭壇があります。住居の跡もたくさんあります。王の墓と祭壇はほぼ南北に配置されています。これは、都市的な集落を作る基準線になっていると思われま。信仰上の基準線となっていて、我々は「聖なる基準線」と呼んでいます。それに沿って、いろいろな施設が作られています。これは何時の時代にも見られることで、中国では、北が上位で南は下位と、これは中国の前漢時代からあるものですが、この吉野ヶ里ではその影響があったのではないかと思います。そして、この基準線の延長戦上に雲仙普賢岳があります。火を吹く山、南の方向にありますので、火の鳥である「朱雀」という意識が既にあるということがいえます。そして、ここに馬の蹄の形のような北内郭跡がありますが、この軸線が、夏至の日の出と冬至の日の入りの線になります。ということは、夏至、冬至というものを十分に組み込んだ生活、暦を作っていた可能性があります。



これは巫女さんの神懸りの様子を再現したものです。こうした集落を復元しました。全部で建物が 99 棟を復元しました。発掘した遺構から見ると、そのまま復元すれば皆同じ建物になります。けれども、当時の人たちの信仰、世界観を我々は可能な限り追求しました。そうした中で、色々な場所にある建物のデザインを考えて復元していません。

6. 神話は絶えず生成される

当時の人たちの世界観、神話というものは実体のない物語ですが、神話には、いろいろな意味があります。神話とは世界の人類がいかにして現在の姿となったのかを説明する象徴的な物語です。あるいは、神話が述べる出来事は不可思議であるのですが、社会の規範として従わなければならないものとして意義付けられていたといえます。こうした祖先がいることで私達祖先の生活があり、その規範はしっかり守らなければならなかったのです。りません。神話の国で有名な出雲の国ですが、出雲の国の建国者は大国主命です。国の中には、それぞれの郡、小さな国にその土地の独自の祖先神がいます。それが中央で編纂される際に抹殺されていきました。大和の祖先神だけが頂点にいる神話が作られたわけです。もともと、各地の国々に祖先神がいたことは間違いないと思います。九州筑紫も肥前、肥後も独自の建国や国生みの神話の体系をもっていたと思います。これは残っている九州の神話の端々からも読み取ることができます。かつての吉野ヶ里にも、国生みの神話があったといえます。どのような神話であったのか、言い換えれば彼らの世界観を窺い知ることからはじめて、私達は歴史公園として「吉野ヶ里国」の首都の威容の復元が可能となったと言ってもいいと思います。ただ、機械的に出てきた建物の跡に合わせて、住居や建物や堀を作ったわけで

はありません。神話は国作りのプログラムであります。そういうものは改めて作られていくこともあります。民族というのも新たに生成されているとも言われています。カナダのフランス系の移民の人たちは、ケベックとして、自分たちを独自の民族として位置付けています。

吉野ヶ里遺跡の環境と植生ですが、暖温帯の広葉樹があって、アカガシ、シイ、クス、モミ、コナラ、クリ、ケヤキ、モチ、ユズリハなどにイメージされる植生があり、これらを可能な限り、吉野ヶ里遺跡でも再現しています。食性は、魚貝などの海生生物、シカ、イノシシ、ムササビなどの陸上動物、シイ、クルミ、ドングリなどの植物性食品、コメ、アワ、そば、小豆、メロンなどの栽培植物となっています。吉野ヶ里遺跡の一角で祭祀に使った壺の中から供物が発見されました。貝やへび、ネズミなどがありました。

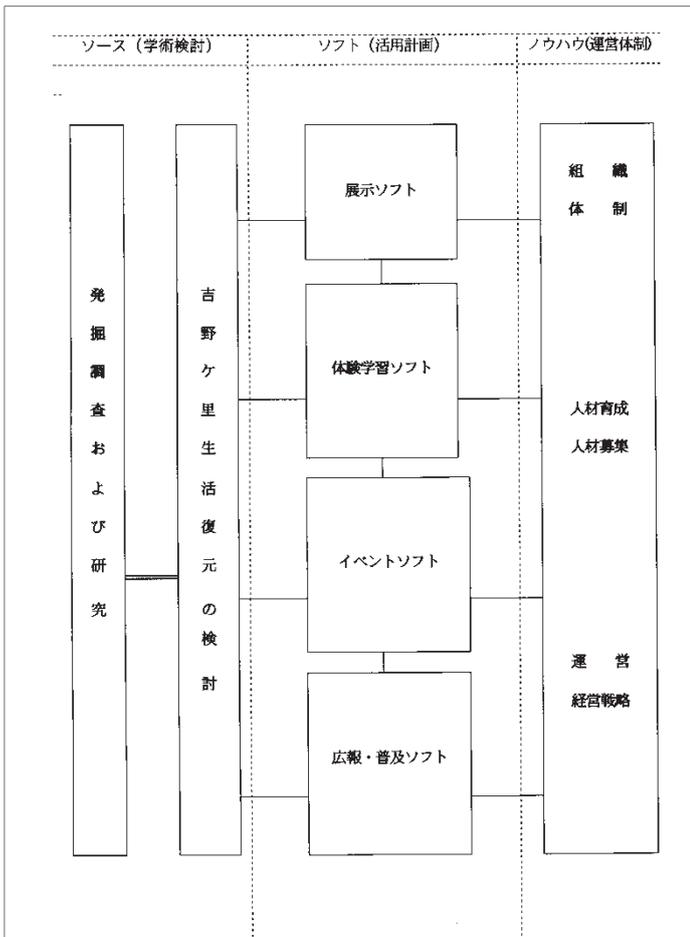
吉野ヶ里が弥生人によって開発される過程をみると、徐々に山が開かれていきます。そして、この時期の食のあり方で、魏志倭人伝では「飲食するに籩豆（へんとう、高坏）を用い、手食す。」と書かれています。現在は、箸やスプーンなどが使われていますが、その歴史は浅いものでして、日本人が箸を使い始めるのは、奈良時代の上の階層の人々からで、庶民はもっと後の時代になります。それ以前は、手で食べていました。皆さんの言葉の中で「食指が動く」という言葉は、その時代の記憶であります。現在の日本人の食事のとり方は、弥生時代から来ているといえます。「いただきます」というのは、神々への感謝を表す言葉であります。共食、みんなで食べる、手食と個人食器がその特徴といえます。日本人ほど個人食器に拘る民族はほかにいません。箸、茶碗、皿など、こうした個人食器は弥生時代からの伝統です。中国の人に「マイ箸」をプレゼントしたら怪訝そうな顔をしていました。それから、生食です。先ほど言いましたが、弥生人は鞭虫に悩んだということです。ですから、こういうところから、日本人の食事のルーツは弥生時代にあったといえます。

7. まとめにかえて-昔はよかった！?-

さて、こうした歴史遺産の活用に関して、戦略というものが必要であります。それは、市民生活の中の社会での位置づけ、市民にとってどのような意義があるのか、どのように扱うか、どのように市民に提供するか、市民がどのように享受するか、どのような成果が期待できるか。これらは歴史遺産だけでなく、行政が設けるいろいろな施策に言えることだろうと思います。歴史遺産・遺跡にどのような

魅力があるかといいますと、第一に学術的な価値です。先ほど吉野ヶ里遺跡を通して申し上げたことです。第二は、市民が遺跡からの情報を通じて、自分なりの推理ができるということです。たとえば、自分なりの邪馬台国論がそうです。第三は、全国で遺跡の発掘調査や研究がいろいろな形で継続する中、市民が遺跡からの情報を常に受信、発信できるということです。第四は、遺跡が周辺の田園、自然と一体となって、固有の風土を形成し、現代人の心と体にとって快適な空間となる、こうした魅力があるといえます。

遺跡の保存と活用にとって大事なのは、「守る」、「創る」、「生かす」ということです。「守る」は、まずは遺跡の保存が第一で、「創る」は、きちっと市民に提供できるような施設整備が必要であります。それから、「生かす」は、それを生かした活用、体験学習など市民が参加できるいろいろな催し物ができるなどの活用であります。そういう遺跡の魅力、あるいは地域の魅力といってもいいですが、そうした魅力を出すための七か条というのを考えてみました。まずは、「好奇心」です。我々は、常に好奇心を持っています。それから、体と心、そして情で見る。視覚、嗅覚、聴覚、触覚、味覚、第六感を含めて、その地域、遺跡を見るということです。それから、その遺跡を観る、地域の歴史を観る、それから風土として観る、自分が絵や地図にして観るということが大事です。そうすると何かその地域のイメージが見えてきます。それから感じたままを大事にしなごら、一方では冷静に観ることですね。よく邪馬台国論にありますが、自分が発掘したところ、自分が住んでいるところが邪馬台国だと言っている方が結構いらっしやいます。そういうのではなくて、もう少し冷静に見ると、もっと他にもいろいろな邪馬台国があるのではないかと思います。それから、「良いところ、好いところ、善いところ」ですね。良いところにもいろいろな見方があるということです。それから最近、遺跡活用と地域社会ということで、遺跡が地域づくりの基本的な資源になるということです。それから計画は施設整備とともに活用、運営プログラムの策定が必要です。ただ整備すれば、勝手にみんな使ってくれるだろうというのではなくて、これをどのように活用するのかというプログラムが必要です。それには市民の参入、参加、参画が遺跡の活用、整備の成否を問うことになってくるということです。魅力ある遺跡の活用の3つの条件として、真剣に努力する人、遺跡の個性、特徴を把握すること、遺跡活用・整備の目的をもっていくということです。目的、目標無しでは計画にはなりません。



これは今日作ってみたのですが、学術的価値として根源的なものです。活用計画ということでソフトを創る。どのような運営体制なのか、ということが必要であります。そうすることで遺跡自身が有効に活用されることとなります。よく「昔は良かった」と、研究者の中には、縄文時代は戦争がなかった、平和だったと、では縄文時代に帰ればいいじゃないかというわけにはいきません。そういうことではなくて、しっかり歴史を見るといえることが必要であります。

これで私の話を終わらせていただきたいと思います。

第24回講演会

日時：平成30年11月22日（木）15：00～17：00 会場：TKP 熊本カンファレンスセンター9階

『風景から考える社会インフラ』

熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター 准教授 星野 裕司 氏

<講師プロフィール>

1971年生まれ。東京大学大学院工学系研究科修了。

株式会社アプル総合計画事務所を経て、現在は熊本大学准教授。専門は景観デザイン。

主な著書に『風景のとらえ方、つくり方九州実践編』（共著、2008）など。

主な受賞として、土木学会論文奨励賞、2012年グッドデザイン賞サステナブル・デザイン賞、都市景観大賞など。

このような講演の機会をいただき、また参加していただき、ありがとうございます。

本日は「風景から考える社会インフラ」ということで、お話しさせていただけたらと思います。本日のテーマは大きく3つになります。一つ目は、「風景から考える」ってどういうことだろうか、二つ目は「つくる」と「つかう」、三つ目は、熊本地震からの復興の渦中でもありますので、「防災・減災とオープンスペース」というところのお話をさせていただければと思います。

熊本で様々な現場に参加させていただき、私もたくさん勉強をさせていただいていますが、意外と地元の皆様の前で話す機会は少なく、本日の話をどうしようかなと思いましたが、熊本の話にも触れながら、せっかくでするので、熊本以外に参加させていただける事例や調査した事例、研究した事例を中心にお話しさせていただきたいと考えています。

まず、「『風景から考える』とは」というところですが、「風景とか景観とは何だ」と言ったときに、教科書的には景観を、「人間を取り巻く環境の眺め」と定義しています。これは私たちの大先輩の中村良夫先生の定義です。次の写真（左上）は、国土交通省熊本河川国道事務所様からいただいた航空写真です。

(写真1)



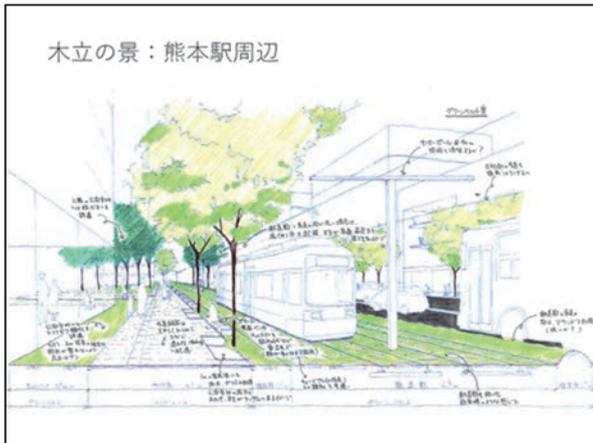
これも1つの環境の眺めではありますが。建物の大きさなど、正しくはわかりませんが、この写真は熊本大学を見ているものです。「熊本大学の横に川が流れている」、「周りには稠密な住宅街が展開している」といった、様々なことが正しく分かります。ただ、「人間を取り巻く環境の眺め」と言ったとき、基本的には、「これは景観と言わない」と授業では教えています。「景観って何か」というと、写真1右下で、この土手の上（左上の航空写真でいうと下側のところ）から眺めた風景ですが、こういうものを景観といいます。つまり地面に立って眺めたときに見えてくる環境の眺めのことを景観、あるいは風景と言うこととしています。

何が違うかということ、すごく当たり前の話ですが、この写真1（左上）には金峰山が写っていません。しかし、写真1右下のように地面に立ってまっすぐ、地面に平行に見ると、見えるものは結構遠くまで見えるわけです。また、背中からは見えませんが、見えるものは遠くまで見えてくるし、見えないものは近くでも見えない。あるいは、近くのもの大きく見えるし、遠くのものは小さく見える。なにを当たり前の話をしているんだということになります。私たちは地面に立って、地面に平行に見ることで、ある種、環境を正しくというよりは、歪んで見ているわけです。中村良夫先生は「結縁」と言っていますが、例えば写真1（右下）は昔の子飼橋の写真ですが、なんとなくアーチが奥の山並みとリンクして見えたり、あるいは川と山を重ねてみると、なんとなく連続しているように、川沿いを進んだら山に辿り着けるような感じがするなど、そういう形でいろんな物語や縁というものが生まれてきて、風景の豊かさがどんどん生まれてくるということが景観の概念であります。そうやって、文学的に表現すると難しくなりますが、簡単に言うと、写真1（左上）のものは「管理者目線」です。

上から見て「はい、ここが大学」、「はい、ここが川」、
 「はい、ここは住宅地」といったように、管理者目線の
 環境の眺めが、こういう上から見たものです。私たちは
 普段そんな風には見ません。「景観から考える、風景から
 考える」というのは、結局、地面に立った目線で環境
 を考える。すなわち「利用者目線」でいろんなことを考
 えていくことです。よく行政の方と話すと、「景観って
 わからない」、「難しい」といったことを言われる方が
 多いです。しかし、一番の基本は「市民目線、利用者目
 線」で考えるということが、「景観から考える」という
 ことの基本中の基本です。それを考えたことのない人は
 いないと思います。暮らしの中で思ったことが「景観か
 ら考える」ということですから、そこをすごく大事にす
 ることが、「風景から考える」、「景観から考える」と
 いう点で、一番大事なところだと思います。

次に熊本の話です。これは熊本駅です。

(図表 1)



熊本駅の周辺整備には長い間参加させていただいてお
 り、今でも継続しています。熊本駅周辺の都市空間デザ
 イン全体を考える上で、図表 1 にも「木立の景」という
 ことが書いてありますが、「景」というのを都市空間デザ
 インの基本にしようということで議論を進めてきました。
 これは私一人ではなく、建築の田中智之先生やユニ
 バーサルデザインの原田和典先生、あるいは行政、コン
 サルの方と議論をしながら決めてきて、「景」というと
 ころで都市空間デザインをまとめていこうというのが、
 熊本駅周辺の一番大事なコンセプトになっています。そ
 れはまさに、一番は利用者目線で考えるということにな
 ります。簡単に言うと、都市デザインで一番難しいのは
 縦割りの克服です。これは電車通りの絵で、絵にデザ
 インのポイントを書いているものになりますが、例えばこ
 れを見ても、民有地、県（県道等）、市（市電等）、そ

して民間など、この絵の中でも、複数の管理者が入って
 きています。しかし「景観から考える」、「利用者目線
 で考える」と、これは県だとかこれは市だといったこと
 は関係ないです。そこが一体となった 1 つの風景が作ら
 れますし、それが快適かどうかというところが問われて
 くるわけです。いろいろと難しい点がありますが、とに
 かく「利用者目線で考える」ことが風景から考える点で
 一番大事なことであり、熊本駅ではそれを実際にやろう
 としています。この絵は、こんな感じになっていますが、
 私がこのプロジェクトで一番好きな景色はこれになりま
 す。

(写真 2)



道ができるにあたって、マンションを建設されるとい
 うことで、「マンションの外構をどうするか考えている、
 是非アドバイスをください。」と、私たちのワーキング
 の場に相談に来てくれました。「ぜひ一体的な道路景観
 を作っていきましょう。」ということになり、この道の
 植生計画を説明し、それと連携するように、同じ木を植
 えるなど、マンションの敷地と、当時は県の敷地では
 したが、同じような植生を施すことによって、一体的な空間
 を作っていくことが実現できた。こういうことは「景」
 として考える上で、私としてはうれしい景色になったか
 など考えます。

基本的に「利用者目線で考える、一市民として発想し
 ていくことが大事だ。」ということとは私が常々、大事に
 していることであり、皆様と共有できたらいいなと思
 うことになります。

それから、次の話は一番ボリュームがあるところになります。「つくる」と「つかう」という点について、お話ししていきたいと思います。

私の専門は景観デザインといって、土木構造物のデザイン、形を議論するということが私の専門になります。基本的には、何かを作るときにそれをどう良くするのか、といったことを考えるのが私の専門になるわけですが、最近では「かっこいいものを作ればいいのか」というと、そういうことではなく、むしろ利用者目線で考えることは当然として「どう使われるか、使い続けるか」、そこをどれくらい盛り込めるかを事前に考えることが、大事になってきていると私自身感じてきているところです。今までは物を作るときに「どうすれば良いモノになるのか」「快適なモノや素敵なモノになるのか」という考えであったが、その「モノ」というより、「どう使われるのか」というところが大事になってきているところで、私自身も勉強させてもらいながら、様々なことに参加させていただいているので、そこを皆様と共有できたいいなと考えています。

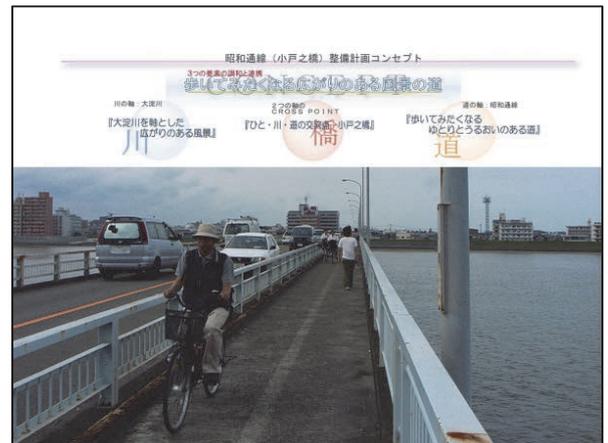
国土交通省の資料は、土木系の行政職員ならよく見たことがあるかと思いますが、橋梁も高齢化しています。私は1971年生まれで、第2次ベビーブームの最初の頃になりますが、まさに日本が大きくなっていった時代に生まれたわけです。その当時、すごく大量のインフラが作られており、当然ストックが充実してきて、都市の建設はしぼんでいきます。簡単に言うと、40歳、50歳にやらんとする、私と同じ年くらいのもが多いわけです。ちなみに、文化財も50年たつと文化財の資格が得られることになります。つまり、今、文化財候補みたいなのが全国にどんどん生まれてきているという状況にあります。それを「どう更新して、維持していくのか」ということが土木系の大きな課題になっています。

それに関連して、先ず紹介したいと思ったのが、この宮崎県にある橋で「小戸之橋」という橋です。これはどちらかというと「つくる」ですけれども、今の時代の「つくる」とはどういうことかを考えた事例になります。

(写真3)



(写真4)



宮崎の「小戸之橋」は、私よりちょっと年上だったと思いますが、1960年代前半ぐらいに架けられた橋で、非常に老朽化も進んでいて、歩道も狭く危険な状態になっており、架け替えることになりました。橋を架け替えるにあたっては、市民とワークショップを行いながら、「どんな橋がいいのかな」ということを議論しながらやってきました。この橋がすごく面白いと思ったのは、架け替えの橋と別に、下流に1本、赤江大橋という橋もありますので、仮橋を作らない、つまり建設中はここを止めるということになりました。それはなぜかということ、単純にお金がない。つまり一気に予算を投入できないため、少しずつ作らないといけない。仮橋を作るお金ももったいない。あるいは仮橋を作って、2~3年で橋を作るだけの予算措置もとれないため、だらだらと作らないといけないということが当初から決まっていました。交通を止めてから竣工するまでに7年半の歳月がかかり、本来でいえば、市民からの不満が大量に出るような話です。しかし、その橋が無い7年半は不便ではありますが、「その7年半に何か価値って持てないのか」、「その7年半をどう過ごすか」というところにも、橋づくりの大

事なところがあるのではないかと、あるいは「7年半を充実させる何か」ってあるのではないかと、実はこの橋で一番議論が盛り上がったところ。橋自体は桁橋で普通の橋なので、こういっては何ですが、大した橋ではないです。機能的に粛々と作れば良いというところですが、むしろこの7年半を積極的に使っていこうということになっています。例えば、壊すときには建設おおよそ50年でしたので、お別れ会をやりましょうということで、「ありがとう小戸之橋 さよならフェスティバル」で、風船を飛ばしたり、でかいナイアガラの滝みたいなものを橋全部に着けて流すといったイベントをやりました。

(写真5)



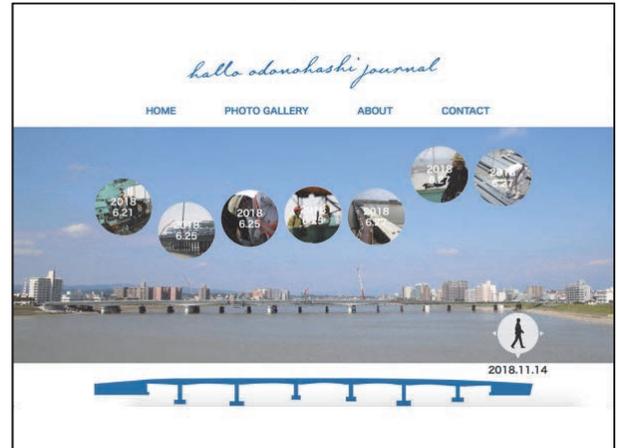
お金がないから一気に壊せないの、半分ずつ壊す。そうすると半分だけ架かっているという風景が1年、川の中ですと出水期は工事もできませんので、半年程度、すごくシュールな風景が残るわけです。また、公共物に落書きをしたら怒られますけれども、壊すものなので、みんなで存分に落書きしようということをやったり、あとは、写真です。このタイミングでしか取れない写真をみんなで撮って応募してもらい、竣工後（この当時からすると約6年後）、もう1回新しい橋の同じ場所に立って写真を撮り、家族の変化などを確認するような取り組みを行ったりしました。

(写真6)



現在は、壊して竣工中になっていますが、「Hallo Odonohashi Journal」というホームページがあり、随時、建設中の状況をおしゃれに報告するようなホームページを設けています。

(写真7)



これは橋を「作り直す」というところ自体に、「つかう」というか「楽しむ」というモードを入れられないかということにチャレンジしたという点が1つと、あと大事なのは、これは宮崎市の事業ですが、私も含めて土木の専門家だけではこのような面白い企画はできないです。この取り組みは、このようなイベントなど、様々なことを仕掛けている地元のNPO団体等と協働して、一緒に企画し、運営してもらった取組です。それから、例えば「小戸之橋魚群ART展示会」や「小戸之橋フォトストーリー」、「みやざきアートマーケット」といった取組があり、「みやざきアートマーケット」では宮崎市の若手のアーティストが絵を描いたり、写真を撮るなど、そういった方々に参加してもらった。インフラの建設とか維持ということに関して、今までチャンネルのなかった若いアーティストの方々などを巻き込みながら一緒にやっていくということです。

つまり小戸之橋でチャレンジしていることは2つです。1つは建設プロセスそのものを「つくる」と「つかう」で言うと、「つかう」の1つの準備の時間あるいは大切な時間にできないかと取り組んだことと、もう1つは、橋の架け替えというところで、協働することの少ない若手のアーティストや、地元の何かしたい人たちとコラボレーションを生むということがチャレンジであったかと思えます。もうすぐ完成しますので、これをどう総括していくのが次のステップになっていくと思えます。これからも私も参加させてもらい、今どきの社会インフラの更新のありかたの1つのチャレンジになるかと考えているところです。

次は公園の話です。公園も先程の橋梁等と同じような状況です。どんどん増えており、面積も都市計画区域で一人当たり10平米と、昔から比べても増えています。ただ、先進国に比べると量としても少ないという話がありますが、やはり、30年、40年と高齢の公園が増えているということは橋梁の話と同じです。

(図表2)

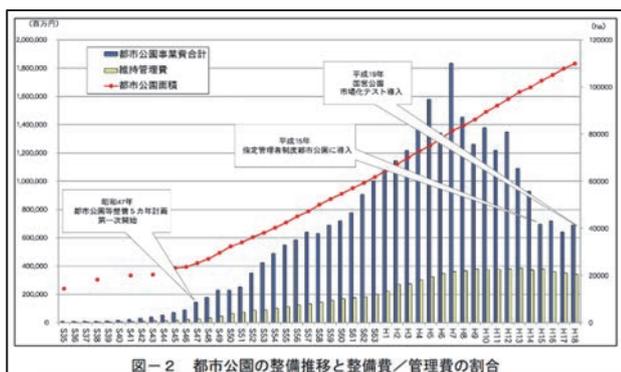


図-2 都市公園の整備推移と整備費/管理費の割合

図表2は蓑茂先生がベース設計資料に投稿された原稿から持ってきたものですが、都市公園の建設費というのは下がってきて、維持費は上がってきている。量としても上がってきており、その中で「指定管理者制度」などが入ってきているという大きなトレンドを表現しているというグラフになります。

次に紹介するのは有名な事例で、ご存知の方も多と思います。今はPFI等が制度化されて動いていますが、そういったものの先進事例で、制度化する前に実現していたものです。

写真8は南池袋公園という公園です。もともと区画整理によって生まれた公園ですが、この下に東京電力が地下変電所を入れるといった、そういう大きな話と絡めてリニューアルされたものです。それは単純な公園のリニ

ューアルではなく、公園の維持の仕組みそのものが大きくリニューアルされた事例になります。景色はこんな感じですよ。

(写真8)



公園の中にカフェがあります。従来、行政が管理する公園には、「施設運営者」というものがありますが、ここでは「公園運営者」という組織を作っています。豊島区、あるいはカフェを運営する事業代表者だけではなく、大事なものは「つかう時代」となったときに「使う人って誰だ」といったら、まずは周辺の人たちなわけです。周辺の町会の代表とか商店街の代表、寺町関係者、あとは第三者として学識経験者などで構成される「公園運営者」というグループがあり、そこが公園を運営していく。また、その運営も東京電力の地下変電所があるということも大事で、地下占有料も1つのファンドになります。カフェレストランも建物利用料を公園に出すことになり。一方で、売上げの0.5%を地域還元費ということで、この「南池袋公園をよくする会」の活動資金にし、公園だけではなくて地域全体をマネジメントしていこうということがあります。

これは行政が持っている維持管理費が減ってきている中、どうするかっていう苦肉の策でもあります。今回の私の話のポイントとして、「利用者目線」ということ。で言うと、私が公園に行ったときは寒い時期で、パッと見の賑わいはそんなになかったですが、それでも人はいて、もちろんカフェの中にはたくさんの方がいました。やはり、こういう取組は、利用者目線で運営ができるというのが1つです。もう1つは、いわゆる行政管理と違うのは、カフェもそうですが、この管理している人、運営している人の顔が見える感じ、遊んでいても「不平があったらここにお電話」という感じではなく、そこに人

がいて、何かあったら言うことができる、管理運営の顔が見えるということが、まず利用者目線ですごく大事であると感じました。ここでお金が循環しますので、いわゆる税金の投入量も当然減ってくるということもすごく大事ですが、まず公園の維持管理は、運営をしている人の顔が見えるということが、今後の「つくる」と「つかう」を考える上で大事なことかなと感じました。

あと、もう一つすごく有名な事例が「てんしば」です。これは大阪の天王寺公園が全部ではなく、一部がリニューアルされた事例になります。大阪市のPPP/PFI事業の大成功事例です。20年間の中で施設を整備し、維持管理していくものです。私はリニューアルする前の天王寺公園に行ったことはありませんが、テレビで見たところ、いわゆるホームレスの方々のビニールテントなどが並び、昼間から彼らのカラオケの音が聞こえるといったところみたいでした。これは公募プロポーザルで近鉄不動産がとっています。近鉄不動産は天王寺駅にあるビルのオーナーですが、「1つのビルだけではなく、エリアとして価値を上げていかなければならないだろう。」というところから応募されたそうです。近接した公園をとって、一体として不動産業をするという感じで、すごく勢いを持ってやられています。不動産の方にヒアリングを行った時には、「こういう建物はできるだけコストを抑えながら、やはり空間の質が重要で、おしゃれじゃないと人が来てくれない。お店もコンテンツもそうですが、建物のしつらえや、オープンスペースのしつらえ、その質が良くないと人は来てくれない」ということで、コストを抑えることと、良い雰囲気を作るということにすごく苦心されていました。

例えば写真9がメインの芝生広場になります。

(写真9)



このとき近鉄不動産の方からお話を聞いて、「確かに、素晴らしいな。」と思ったのは、芝生広場を作っていて、集客したいので当初は一生懸命イベントをやっていたとのことです。しかし、私が行ったのは2年前になりますが、その時は「イベントはできるだけ止めようと思っている。」とのことで、それはなぜかという、「イベントをすると芝生が荒れる。やらなくてはならないイベントはやるけど、それ以外のイベントはできるだけ止めようと思っている。」とのことでした。それはネームバリューや認知の向上が進んだからというのも1つあるかと思いますが、担当者が言っていたのは、「イベントをして人を集めると、それはそれですごくいいことですが、その後の維持管理、あるいは芝生が荒れることによる維持管理が必要となり、その間、人が入れない。そういうことよりも日常的な利用でこの芝生に人々が行こうという日常的価値の方が圧倒的に高い。」ということで、いわゆるカウントできるような人数が取れるわけではないが、この大阪という大都会の中で、「気持ちいい芝生がある。」というところの価値の方が、「イベントして何人集めた。」といったことよりも圧倒的に高いということがわかってきて、そういう風にしようかなという話を私がヒアリングに行ったときはされていました。ここはすごく典型的で、有名すぎる事例となりますので、もし皆様をご存知でなければ、行ってみるといいかと思います。

熊本でもそれに近いことは始まっていて、これは「白川・緑の区間」という国土交通省がやっている河川空間整備です。

(写真10)



治水のための河川改修で、大甲橋から名午橋の間になりますが、河川改修事業が動いており、まだ完成には至っていませんが、こちらにも参加させてもらっています。

MIZBERING のイベントなどもやらせてもらっていて、写真11は2015年頃に暫定開業みたいなものを熊本河川国道事務所が主導して行ったイベントになります。また、地元の九品寺のあたりでは、今、街づくりがすごく盛んになっていて、「Shirakawa Banks」という地元の団体が立ち上がり、夜市や夏祭りを行ったりしました。その時に「場所はどこがいいだろうか？」ということで、この川沿いで様々な活動を始めてくれるようになりました。これは、行政としては場所を貸しているだけで、もちろん熊本市中央区役所の方など、様々なサポートはありますが、今、こういう場が生まれ始めています。「南池袋公園」や「てんしば」とは違いますが、これも1つ同じような形が生まれつつあるのかなと考えています。

(写真11)



すごく時代を表していると思うのが、写真11に旗が立っていますが、これは「MIZBERING」といって、国土交通省が水辺や川辺などを、もっと人に活用してもらいたいと始めた取組で、もともと舟運が盛んだった時代には、坪井川もそうですが人々は川に表を向いていました。しかし、川の機能的価値が下がって、人々は背中を向け始めました。「また川に表を向けてほしい、水辺に賑わいを戻したい」という活動をされていて、旗はそのロゴになります。

MIZBERING でいうと、今、水辺では様々なことがやれる状況になっており、「時代だなあ。」と思ったのは、今年のグッドデザイン賞です。

(写真12)



グッドデザイン賞っていうのは、写真12左上のマークをよく見たことがあるかと思います。車や文房具、時計、テレビなどでよく見かけますし、熊本ではテレビを見ていると、住宅メーカーなどが「グッドデザイン賞取りました。」みたいな宣伝も多いと思います。実はそのグッドデザイン賞というのは、毎年3000~4000程度の応募があり、その1/3の1000程度が受賞しています。もちろんその1/3になることも大変ですが、「金賞」や「特

別賞」など、さらに上の賞があります。今年（2018 年）のグッドデザイン賞は、3000～4000 程度の応募があった中で、金賞はその 1/100 の 30 程度になります。そのグッドデザイン賞の金賞を「MIZBERING」の活動が受賞しました。つまり、「モノ」じゃなくて、「つかう、つかわれたモノ」、使う形それ自体がグッドデザインというものの対象になる時代になってきており、もちろんそれは今回に始まったことではないですが、それが金賞などをとるレベルまでなっている。ちなみに大賞は、お寺の活動で「お寺に子どもを集めてみんなでご飯を食べることで孤食を防ぐ」といったような活動が大賞だったと思います。やはり「いいモノを作ってカッコいいよね。」という時代ではなく、カッコいいモノの総本山であるグッドデザイン賞というところでも、問われ始めてきているのかなと思います。ちなみにこれが「MIZBERING」がグッドデザイン賞に応募したときのパネルです。

(写真 1 3)



この一番上の写真は白川です。つまり「MIZBERING とは何か」というと、写真 1 3 にも「プラットフォーム」と書いていますが、具体的な何かというよりは、「使い方のパッケージング」あるいは「ラベリング」のようなもので、水辺で何かやりたいとなったときに、「MIZBERING」という枠組みや名前を与えるというような取組みです。そういう場所がどんどん増えてきているというムーヴメントそのもの、ムーヴメントを起こすための仕掛けが「MIZBERING」です。こういうこと自体がグッドデザインというものの賞に当たるということになってきていると思います。

次に水辺の一般論みたいな話になりますが、よく日本は「広場がない」と言われます。ヨーロッパのカンポ広場など、そういう広場がなかなかないです。これは京都の四条大橋のあたりの写真で鴨川です。

(写真 1 4)



ここに行くと、本当に何にもなくても人が座っています。特に鴨川は、川の流れを安定させるために落差工という小さな段がたくさんあって、それがすごくいい音を出すということもあり、この川のエッジに人がすごく並んで座っています。こんなを見ると、日本の場合は水辺が「西洋の広場」のようになっているのではないかと感じています。蓑茂先生もよく言われますが、熊本中央公園も白川沿いで、昔は河原公園というものがある橋の少し下流ぐらいにあって、そこに劇場や芝居小屋などがあつたらしいです。そういう意味では、こういう公共空間を「つかう」ときに、特に日本では水辺が大事だと思います。「本当に水辺が広場だなあ。」と思ったのは、愛知県豊田市にある矢作川という川で、「橋の下世界音楽祭」という音楽フェスを毎年開催しています。河原で音楽フェスを開催し、すごいのが全部投げ銭というところなんです。入場料なしで、全部投げ銭形式、2000 円払うと手拭いをくれますが、基本的にはフリーフェスとなっており、世界中からアーティストが集まって行っています。去年参加させてもらって、刺青などをしている人も多かった一方で、街中の川になりますので、おじいちゃんがお孫さんと散歩に来ていたり、今、社会的包摂などの話がありますが、まさに、そういう混在した空間を体現しており、歌舞伎が生まれたのも河原で、「もしかしたら、昔の鴨川の河原とかもこんな感じだったのかも。」と、すごく実感できました。やはり水辺というのは、この多様性を受け止めるきっかけとしても、あるいは多様性を

受け止める場としてもすごく大事なのではないかと実感させていただいています。

熊本のことに話を戻します。まだまとまった話を皆様できるようなところまでは至っておりませんが、最近、江津湖の議論にも参加させてもらっています。

(写真 15)



写真15は「みなも祭り」の写真です。指定管理をされている造園協会の方々が仕切られており、こういう取組が頻繁に起こると本当にいいなと思っています。ただ、大事だと思うのは共存です。屋台やイベントなど、すごく人が賑わっているということも大事だと思いますが、一方で、それに関連してだとも思いますが、そのイベントの企画とは関係なく遊んでいる人たちや、のんびりしている人たちがいる。やはり、水辺の魅力というのは先程の「橋の下世界音楽祭」とまではいかなくとも、多様なものを受け止める懐の深さみたいなものが大事だと思います。そういう点でいうと、白川は街中にあり、物理的に懐の深さは厳しいものがありますので、熊本ではこれに近いポテンシャルがあるとすると江津湖になると思っています。先程の「てんしば」の話ではないですが、ある種の指標や多様性、活動の種類、量ではなくて質といった取組など、そういうことを評価していくことが大事であると思います。

私は「税金などではできるだけ安く」、「できるだけ行政が負担する維持費を下げて」といったことも大事だとは思っています。一方で、写真16の特に上の方は江津湖がらみの風景になりますが、こういったところはあまり賑わってほしくないという気持ちもあります。そうすると、「しっかり稼げるような場所」と「のんびりできる場所」、つまり、お金を入れて維持していくところ、特に、江津湖の場合は水質や湧水量など、環境それぞれが生命

線になりますので、そういうものをしっかりと維持していくことが大事だと思います。「てんしば」でも先程の話のように、「ここでは稼ぐけれども、ここではイベントなどはやめてのんびりさせる。」といったことも考えられています。そういう取組も大事であるとも思っています。

(写真 16)



そのような中、少しまとまったプロジェクトの話をしていきたいと思います。豊田駅西側、東側は、インフラの更新で、バスターミナルの集約など、すごく大きなリニューアルをしようと再建しています。熊本駅の議論に参加させてもらっていたということも、土木と都市をいっしょに議論できるということでお話をいただき、ここにも参加させてもらっています。

(図表 3)



図表3が駅で、西側のペDESTリアンデッキの老朽化によるやりかえと、東側のロータリーなどをやりかえて、人のためのスペースを作るという動きが起っています。そのトータルデザインをするためのアドバイザーという形で参加させていただいています。私がこの豊田のプロジェクトで「いいな」と思うのは、どんなデザインにす

るかといった「つくる」議論の前に、「あそべるとよた」という使いこなす活動の方が2年早かったこと。これはどういうことかということ、既存の広場になりそうな、あるいは広場っぽい6つのスペースがあり、そこを地元の方々に「使いこなしてもらおう、遊ぼう」といった取組です。

(図表 4)

図表 4 は 2017 年のチラシで、この 6 つを 8 か月まるごとお貸しします。ほぼ平常設のようなこともできます。しかし、このチラシは取組を始めて 3 年目のものです。最初は数日、次は 1 か月といった感じで、どんどん期間も延びてきて、半年という形でも使える、使ってくださいということをやっていました。

例えばどんなどころかということ、こんなところ。ペDESTリアンデッキ広場というところ。です。

(写真 17)



これは老朽化で建て替えが予定されていて、そのデザインなどを議論しているところですが、これが数年前の写真ですが現状です。

豊田市はお金があるので、立派なものを作っていますが、立派だけ人はいないといった景色でした。「ここもつたいないね」ということで、コンテナショップみたいなものを置いて、屋台みたいな感じで 2017 年は 7 月～8 月ぐらいやってもらいました。暑かったり、寒かったりもあったりして大変だったらしいですが、このようなチャレンジをしていました。

(写真 18)



私が関わった「緑の区間」も、作った後に使ってもらうというところはやっていましたが、豊田の場合は、まず「つくる」を議論する前から、「つかう」というところから始めて、その知見を「つくる」にフィードバックしていこうと、「フィードフォワード」と言ったほうがいいのかもかもしれませんが、盛り込んでいこうという枠組みで動いています。

(図表 5)

これが「つくる」というところのマスタープランみたいなものになりますが、「つかう」と「つくる」のサイクルによる循環を良くしていくことを一番中心に進めています。

例えばパースなどを書きます。これはデザインブックという基本計画の説明書になりますので、パースを書きますが、「つかう」チームと議論をしながらになりましたので、意味のないパースというか、きれいなパースを書くのはやめようと思いました。

(図表 6)



全部に日付と時間が入っています。これは「祝祭」という車をずっと引っ張って歩くというものになりますが、その風景です。

(図表 7)



これは小さな子どもたちが帰ってきた後の平日の景色。

(図表 8)



これは放課後ですね。もう高校生なども帰ってきています。時間や季節など、そういうものを常に具体的にフォーカスしながら、できるだけ議論をしたい。こういう絵なんかも、そういう表現で行こうという感じが表れているかなと思います。

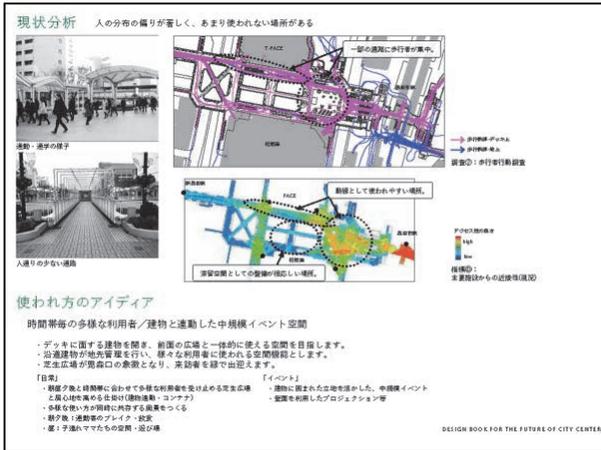
例えばデザインではどんな話になっているかという、先程のペDESTリアンデッキの上でコンテナショップを置くといった実験などをしていますけど、それがどうなっているかという、どんどん変わってはきていますが基本計画の段階ではこんな絵でした。

(図表 9)



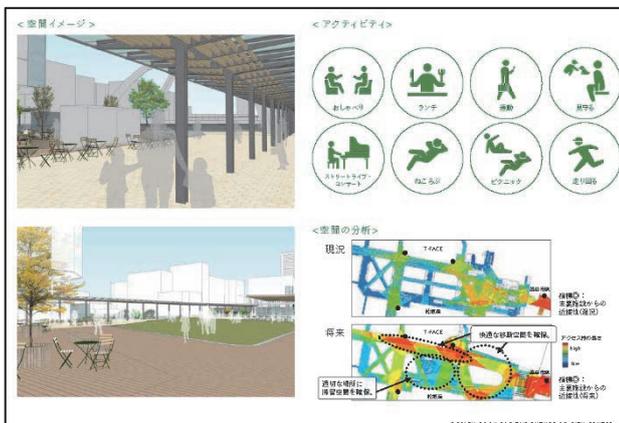
やはり「つかう」ということから発想することは、しっかり分析をするということでもあるのかなと思っています。

(図表 10)



図表 10 は交通量調査です。交通“量”ではなく、いわゆるカウントではなく、交通“軌跡”調査です。これは人がどうやって流れていくのかを網羅的ではなく、ある時間のある一部の流れについて歩行者の軌跡を全部トレースしたものです。そうするとまんべんなくではなく、ギューギューな場所とスカスカな場所が当然生まれるわけです。利用者目線と言うと、迂回したりしませんのでそうなります。これが現状です。これはスペースシンタクスという、こういう空間を評価する分析の手法になりますが、それで分析したとき、赤いところほど「アクセス性が良い、行きやすい場所」となり、青いところほど「行きにくい場所」という分析の結果です。こういった分析を生かしながら、「じゃあ、どうしようか」となり、簡単に言うと、ペDESTリアンデッキも開口部の位置を変えています。

(図表 11)



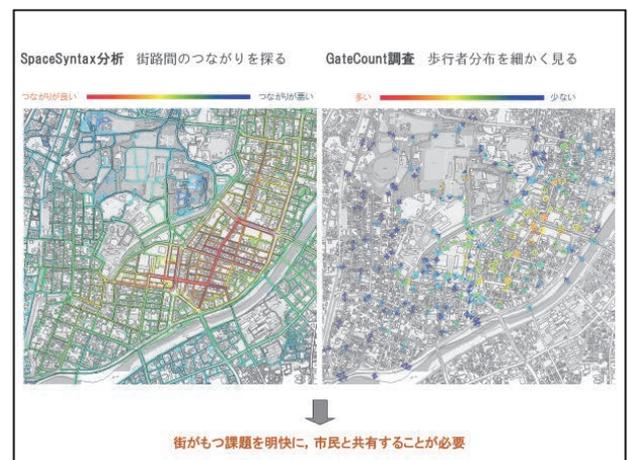
現状 (図表 11 右下の現況) では、T-FACE と松坂屋の間は穴が多くあり、下がバスターミナルになっています。そこに人がいないのは当たり前ですが、実際、提案しているのは下の形 (図表 11 右下図の将来) です。人がた

くさん動いて流れやすい所は、むしろその導線をスムーズに流すようにして、むしろ人が行きづらくて閑散としたところに広場的な部分を持つてくる。例えば先ほどのコンテナショップは人がすごく行き交う所にあつたら邪魔なわけで、むしろ、少し外れた場所に作ってあげて、活動を展開させていくということを反映していくわけです。「つかう」というところをベースにするというのは、単純にこういう場所をどうこうするというよりは、具体的な「つくる」に対してこういうフィードバックがあり、他の分析も入れながら、「つくる」に反映していくということができているかなと思います。

参加していて理想で言うと、さっきの南池袋公園の地域還元費みたいな形で、全体のエリアマネジメントなどにお金が回っていく、ということを目指しています。出来上がるまでにはけっこう時間がかかります。ただ、課題もあります。行政は担当も変わったり、あるいは受け手側も個人的な事情があつたりと、持続性としては3年続けるのはけっこう大変かなというところです。そういったことが課題で、豊田市も構想していたほどうまくいくかは予断を許さないというような感じです。

実は10年位前に熊本でもこれと同じ調査を1回したことがあります。図表 12 の左側が先程のものと同じで、熊本の街中の街路を全部アクセス性みたいところで分析したものです。赤いところほどつながりが良いライン、青いところほどつながりが悪いラインとなります。

(図表 12)



実感ともすごく合っていて、下通、新市街、上通あたりは赤く出ていて、「確かに賑わっているな」といった感じです。あと銀座通もけっこう赤く出ています。右側が実際の交通量です。いわゆる断面交通量とは違う計測の仕方なので、それとは少しずれてはいますが、赤いと

ころは人が多く、青いところは少ない。例えば、桜町の議論にも参加させてもらっていますが、下通や桜町周辺は、震災復興で区画整理がされているので、道が結構しっかりしていて、実はアクセス性などの数字は良く出ます。電車通りの交差点で人が待たなくてはならないのをどう評価するかによって変わってはきますが、これはそこを評価していないので、より赤くなっています。一方で、あまり人はいないので、そこら辺のギャップがなぜなのかということなども考えながらやっていく、もちろん、そういうことを念頭に置きながら私たちは議論をしています。本当は熊本の街全体の分析と評価も展開していけるとよかった、あるいはいいなと考えています。

あと豊田市で「いいなあ」と思ったのは、こういうファニチャーで、写真19は暫定の歩道をきれいにしたもので、木製で再開発ビルに合わせています。

(写真19)



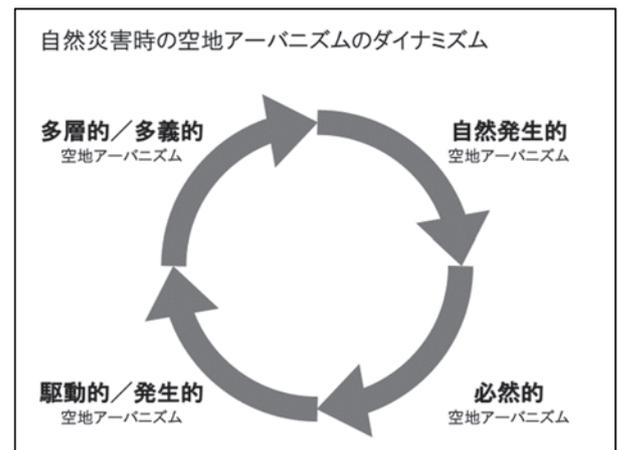
日本全国の課題として、日本中に大きな山など、そういうものを抱えた市町村はたくさんあります。平成の大合併など合併でくっついたところと、もともとあったところのある種のギャップの問題がよく課題になったりしていますが、豊田市も大きな課題になっています。当然、合併したところは山を大きく持っていますので、林業が盛んだったところもあり、合併してときにその山と街を「どうつなげるか」が大きなテーマになっていて、合併して一緒になった山の木材を、いくつかのデザインでファニチャー化して置いています。「いいな」と思うのは、それがずっと置きっぱなしということです。結構物自体が重いので、簡単には動かせないため365日ずっと置きっぱなしになっています。つまり、先程の「つかう」というところから発想していくときのポイントとして、こういう具体性、あるいはシビアな分析、あとは「やって

みよう」といった実験精神みたいなところも「すごいいな」と思いましたし、そういうことにもチャレンジしていけるといいのではないかと考えています。

そろそろ終了の時間になってきました。平成28年熊本地震がありましたので、「減災・防災とオープンスペース」といったところでいくつかお話をさせてもらって終わりにしたいと思います。熊本地震があって、当事者として被災しながらも、一方で研究者でもあるので、いろんな観察をしていたわけですが、オープンスペースの使われ方が「どんどん変わっていつているな」というのを強く感じました。被災地ですからクリアに出てきたことではありますが、「オープンスペースが担うべきそれぞれの役割なんじゃないかな」と考えたことをお話させていただきます。

まずは、この「4つのサイクル」になるかなと整理したものです。

(図表13)



まずは自然発生的です。これは「(仮称)花畑広場」(以下、「花畑広場」という。)のことで、ちょうどイベントがあった日の夜に地震があり、避難者が花畑広場に来て、イベントのテーブルなどをうまく使って避難されたとのこと。本来は計画していくべき部分もあると思いますが、今回のように「自然発生的に生まれるオープンスペースの利用の形」っていうものもあるということを実感しました。それから、地震発生から少し経っていくと花畑広場は「ボランティアセンター」になりました。まとまったオープンスペースで交通の便がいいところにあるというところの価値というのは、こういったところにも感じられました。そういう必然的な「やるべきことをやらなきゃいけない場所」として、オープンスペースはすごい価値を持っていると感じました。

(写真 2 0)



あとは、熊本駅周辺の白川です。被災後はみんな集って、「元気出そうよ」「がんばろうよ」といった場が欲しいと思います。ここでは「駆動的/発生的」なんて表現をしました。

(写真 2 1)

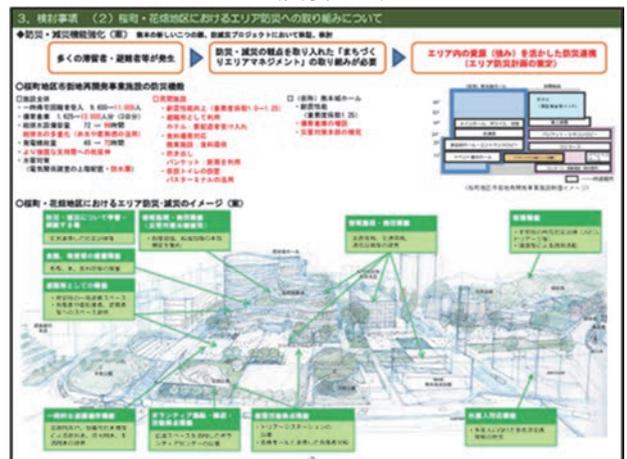


写真 2 1 の中央に白いカウンターみたいなものがありますが、これは熊本駅周辺の都市空間デザインの中で、「白川沿いもしっかりやりたい」ということで、大きな変更はできないので、この治水用のパラペットの上に白いカウンターを載せて、こういったイベントができるようにしようということで、熊本駅周辺の都市空間デザインの一環としてやられていたのですが、これができて6年ぐらいだったと思いますが、地震まで1回もこんな風に使われたことはありませんでした。しかし、地震があり、熊本の青年会議所が仕切りで入っていたのですが、「MIZBERING」の活動で知り合いになった青年部の方が、この場所のことを知っていて、「ぜひ使いたい」ということで、「くまもと復光祭」という川に光る玉を流す等のイベントがあり、その時にオープンスペースを余白に

すると、こういった場になり、それは1つ価値があるなと思いましたが。そして、最終的には「多層的/多義的」と書いていますが、いろんな意味、使われ方を包含するような場所となっていくということが大事かなと思っています。

蓑茂委員長のもと、桜町花畑町周辺の検討委員会に私も参加させていただいています。そこでも、いわゆるデザインだけではなく、これは「エリア防災」という取り組みとして、再開発ビル、国際センター、朝日新聞、NHK、NTT、あるいは熊本城の方を見ると、国立病院もあります。FM熊本などもあります。「そういう周辺エリアの能力を結集して、防災の拠点になるようにするにはどうすればいいか、その時にオープンスペースってどういう価値があるのか」といったことも議論しているわけですが、やはり「こういうところをどれくらいうまく取り込めるか、重層的にオープンスペースの中に実現していけるか」ということが大事になるかと考えています。

(図表 1 4)



最後に少し話がランダムになり申し訳ないですが、私はコペンハーゲンに11月に行ってきました。2年前にも行っていたのですが、「防災・減災とオープンスペース」というところを少しお話しておきたいなと思います。おそらくこの講演会の次のテーマが「グリーン・インフラ」になるというような話を聞いていますので、その予告ぐらいに聞いていただければと思います。

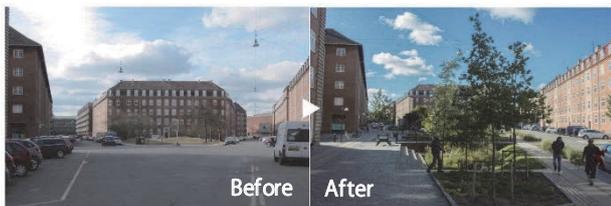
それは「Copenhagen Climate Adaptation Plan (気候変動適応プラン)」です。デンマークは干拓地で、海面の上昇やゲリラ豪雨ということに日本以上に脆弱で、それに対する「Adaptation」です。「柔よく剛を制す」的な話です。ガチッと止めるのではなく、どう適応していくのかという計画が立てられています。

(写真 2 2)



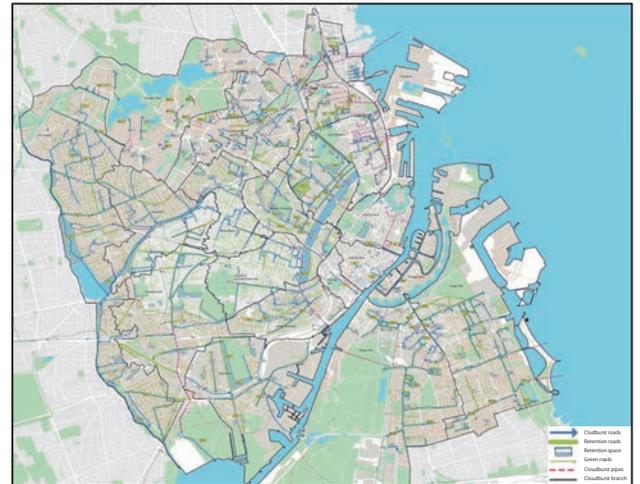
右側の写真が「cloudburst management plan」というもので、こちらのほうが新しいです。この「cloudburst」というのは「雲が爆発する」という意味で、日本語だと「ゲリラ豪雨」とほぼ同じ意味で使われています。向こうでもゲリラ豪雨的な水が多く、それにどう対応していくのかということは今、すごくやられています。そのパイロットプロジェクトになったような広場が次の写真です。

(写真 2 3)



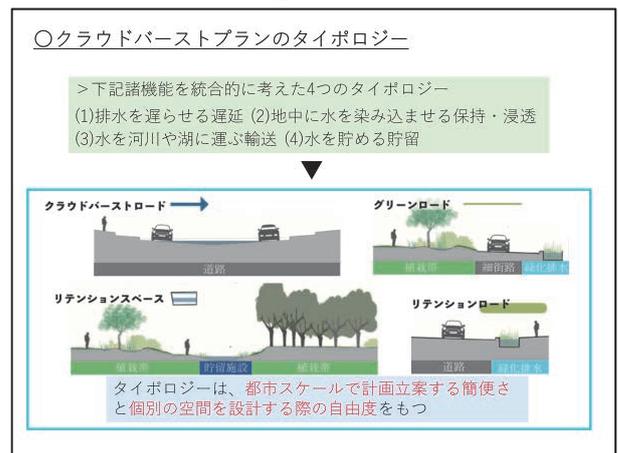
この「cloudburst management plan」は、マスタープランが次の図になりますが、コペンハーゲン市のほぼ全域をカバーした 300 のプロジェクトの集合体の計画になっています。

(図表 1 5)



一気に 300 のプロジェクトを立ち上げているわけです。「そんなのよくなるな」と思ったら、すごく簡単になっています。もちろん全体のシミュレーション、科学的な根拠を持ちながらも、この 300 の全体計画の中で、「クラウドバーストロード」と呼ばれる、大雨が降ったら道が水の通り道になりますよという道、「グリーンロード」っていう緑も入れて少し水の流れをゆっくりさせるような道、「リテンションロード」というのはむしろ積極的に貯める道、「リテンションスペース」という面的に雨水を貯める場所という 4 つと、あとは雨水の排管の大きなパイプ、その 5 つを組み合わせ、100 年に 1 度の雨水確率で浸水深が 10 センチになるように、この 5 つ (4 プラス 1) を組み合わせた全体計画となっています。

(図表 1 6)



非常にシステムティックであります、すごく簡単になっています。あとは「できることからやっていく」ということで、ちゃんと完成しているのは 1 つだけです。しかし、11 月に話を聞いたら 300 中 50 が動いていると

言われていました。その動きの程度はいろいろありますが、これが第 1 号になります。

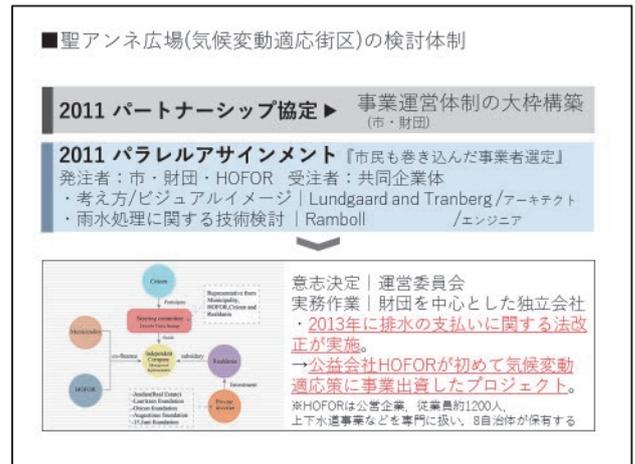
(写真 2 4)



写真 2 4 のような普通の道、中央広場みたいなものを持っている道をリニューアルした感じです。結局、雨が降ってきたときに、この真ん中の緑地帯が少し下がっていて、少し水を貯めて、ここから浸透させたりして水を貯めるリテンションロードとなります。先ほどのタイポロジーでいうところのリテンションロードの 1 つの形になります。

私も「学びたいな」と思ったことは、1 つは計画のシンプルさ、でも全体像を先ず書くということ。もう 1 つは、欧米のこういうものを見ると、日本を考えると知恵に対する価値が違うなということを実感しました。例えば、これは市民をすごく巻き込みながらやっていますが、このパラレルアサインメントというのが重要で、市民を巻き込んだ事業者選定ということで、つまり、受注者が決まって、受注者が市民を巻き込むのではなく、実は、受注者が決まるまでに市民が巻き込まれている。

(図表 1 7)

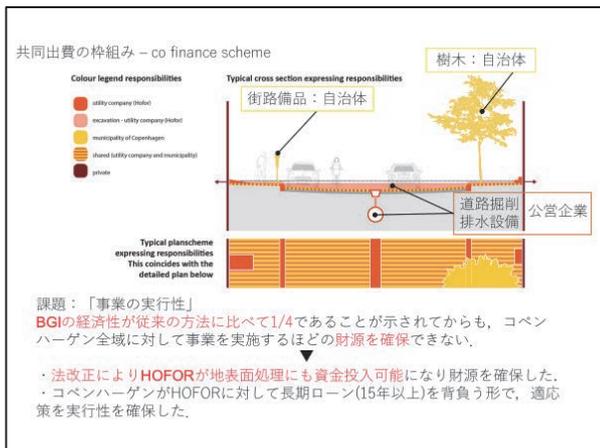


簡単にいうと、基本設計を並行して 3 本出しています。3 社に出して、市民と議論をしながら基本設計をまとめてもらい、その中で良いものを選ぶ。2 本分の基本設計は無駄になりますが、こういった形で決めています。実際、これは欧米だとけっこう事例があります。つまり、全体の事業費や、その整備によって得られるメリット、便益などに関していうと、建設費やそこから得られる便益などと比較して基本設計料は微々たるものです。つまり提案に競争させるというよりも、基本設計で競争させて良い所を選ぶというのは、ニューヨークの「ハリケーンサンディ」からの復興に関してもやられていますし、ヨーロッパだと、大きな橋などはデザインビルドで施行者も含め、3~5 社に基本設計をさせて選ぶ。ということをやられています。そういうことがすごく大事だなと思いますし、あとクラウドバーストマネージメントで大事だと思うのは、法律を変えてお金の出方も変えているところです。

コペンハーゲン市では水道局が民営化されている「公益会社 HOFOR」があります。熊本も多分そうだと思いますが、水道ってけっこうお金があつたりします。ただ、本来であると水道に関連するもの、つまり上水道とか下水道の整備等にしか使えないわけですが、法律を変え、図表 1 8 の表面が雨水排水やゲリラ豪雨対策に貢献する、簡単にいうと、次の 4 つのタイプに適合する、あるいはこの計画に則った整備であれば、表面はそのまま雨水排水のための施設にもなりますので、HOFOR と行政が一緒にお金を出して整備する。細かく言うと、縁石は貯めるところなので、これは HOFOR だけが出します。パイプも HOFOR だけが出します。車止めや街路樹などは雨水が関

係ないので、それは行政が出すということでお金の出方を変えています。

(図表 18)



このBGIというのは「Blue Green Infra」の略になりますが、大きなパイプでゲリラ豪雨対策をするよりは、こういう表面も使ってゲリラ豪雨対策をしたほうが、安いという計算が出ていたのですが、財源が確保できなかった等でなかなか実現できなかったのが、HOFORのお金を表面等にも使っていく。つまり、この整備でコペンハーゲン市が単独で出しているお金はほとんどありません。そういったこともこれからすごく考えることなのかなと思っています。

最後になりますが、「風景から考える」ということは「利用者目線」です。それから「つくる」と「つかう」ということは、簡単にいうと「餅は餅屋」ということで、民間の方などと連携しながらやるということ。あとは実験精神といったことが大事になる、あるいは行政がすべきこともあると思います。コペンハーゲン市の話なんかを見ていると、まず行政として何が大事なのかを総合的な戦略、ビジョンといったものを作って、その中に「餅は餅屋」ということで民間などを入れていく。結局、潤沢に行政がなんでも隅から隅まで見れたという時代ではなく、特にインフラ整備においては、行政はビジョンなどを求められてきているのかなというところです。

以上で私の話を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

(図表 19)

風景から考える、とは？
→利用者目線

「つくる」と「つかう」
→“餅は餅屋”，実験精神

防災・減災とオープンスペース
→総合的な戦略性

第 25 回講演会

日時：平成 31 年 2 月 22 日（木）15：00～17：00 会場：熊本市役所 14 階 大ホール

『グリーンインフラを活かした住みやすい都市づくり』

東京農業大学地域環境科学部造園学科 准教授 福岡 孝則 氏

<講師プロフィール>

ペンシルバニア大学芸術系大学院ランドスケープ専攻修了。

2012 年より Fd Landscape 主宰。神戸大学持続的住環境創成講座特任准教授。2017 年より東京農業大学地域環境科学部准教授。

主な社会活動に、国土交通省・人口減時代における新たな国土利用管理（国土と自然環境）有識者委員、神奈川県都市計画審議会委員など。主な著書に『Livable City をつくる』（マルモ出版、2017）など。

主な受賞に、2015 年度グッドデザイン賞（旧厚生省公務員宿舎のリノベーションプロジェクトであるコートヤードHIR00）がある。

はじめに

皆さんこんにちは。本日は、「グリーンインフラ」と「住みやすい都市」とをつながけながらお話します。

私の事を簡単に紹介しますと、「パブリックオープンスペース」といわれる公共空間の計画や設計を専門としています。またグリーンインフラをテーマに研究なども行っており、著書もいくつか出しています。社会的活動として講演や、縮退都市の中の空地をどのように考えていくかなど、様々なまちづくり関係の委員会にも関わっています。その傍らで自分自身のプロジェクトを動かしつつ、研究と教育、実践とをうまく回していくことを意識しています。

1. リバブルシティをつくる

(Creating Liveable city)

まずはじめに「住みやすい都市」ということに関して「リバブルシティ」の話をしします。「住みやすい都市」というのは新しい概念ではなく、昔からある非常にオーセンティックな概念です。「リバブル」というのは「住みやすい」、「快適な」、「居心地の良い」といった意味ですが、「リバブルシティ」という概念は、都市を経済力や利便性、競争力だけではなく、そこに働く人、生活する人たちが様々なライフスタイルを選択しながら住み続けることができる都市、というように定義付けられています（図表 1）。

非常に曖昧で広い概念ですが、例えば熊本を住みやすい都市にしていくといったときに、どのような都市の戦略を立てていくのか、ただ熊本に移住してきた人に交付金を出すような目先の話ではなく、どのようにして「住みやすい都市」をつくっていくのか、という事が非常に重要なことだと思っています。

(図表 1)

Livable=Live + able

「住みやすい、住むのに適した、快適な」

Livable City リバブルシティ

リバブルシティとは、都市を経済成長、利便性や競争力だけで考えるのではなく、**そこで働き、暮らす多世代の人たちが、「文化・社会」「健康」「環境」など多様なライフスタイルを選択しながら、快適に「住み続けることができる」のかを考えるためのコンセプト**

私が「リバブルシティ」という言葉に出会ったのは、1990 年代後半からアメリカの都心部で、沢山の廃れた公園や使われなくなった公開空地などのオープンスペースの再生に携わっていた時です。その頃、住宅政策の転換の影響もあり、郊外の庭付き一戸建て住宅に住み、毎日 1 時間ほどかけて車で都心部に通うライフスタイルから、街中で利便性の高い住み方、もう少しコンパクトな住み方へと変化が生まれていました。このように街中に暮らすと庭を持たないので、それに代わるものとして行政主導で屋外の公共空間の再生、再整備をしていく流れの中で私は仕事をしていました。例えば、歩行者空間でウォーカビリティ（歩きやすさ）を追求した再整備や、誰にも使われていない公開空地をどのように人が使いやすように改修するか、といったことに取組む中で、これからの時代、「住みやすい都市」をつくっていく上で屋外の公共空間というものが非常に重要になると体験的に理解をしてきました。日本の街中でも中心市街地や都心部への人口集中がどこでも起きていますが、そうした現象に対して私たちの専門分野からお話をしたいと思いません。

図表 2 は、「リバブルシティ・ランキング」を取りまとめたものです。世界には様々な都市のランキングがあります。私が注目しているのは、例えば「グローバル・リバビリティ・ランキング」で、イギリスのエコノミスト誌が作っている世界のリバブルシティ・ランキングの指標です。ここで選ばれた都市は、主に欧米の都市が多いのですが、どの都市をリバビリティの観点からランクづけすることで、企業の役員がどこに住むか、新しい支社をどこに開設するかなどの参考として始まった信頼性の高いものです。それから、表の 3 番目に「クオリティ・オブ・ライフ ランキング」というものがありますが、これは、イギリスのモノクル社という出版社が出している、都市の生活の質のランキングです。このランキングでは、東京や福岡、京都などが近年かなり上位に食い込むようになってきました。日本の都市が持っている安全性や住みやすさ、コンパクトな魅力、人の繋がり、食の文化の質の高さなどは、世界と比べても遜色ない魅力をもっていることの現れでしょう。それから、熊本市の皆さんが熊本と日本の他の都市を比べるだけでなく、世界の都市と比べたときに熊本はどうあるべきかという性格付けや、これからどうありたいかということが見えてくるのではないかと思います。

(図表 2)

指標名	指標の概要	指標の測定方法	指標の単位
Global Livability Index (2016)	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標
Quality of Living Survey (2016)	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標
Quality of Life (2016)	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標
シティブランド・ランキング	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標	・生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標 ・都市の生活の質を測る指標

図表 3 はモノクル社のランキングのチューリッヒという街を紹介する動画の一瞬を切り取ったものです。ここで見せているのは、建物がほとんど真っ白で背景として写っており、河川、それからオープンスペースのネットワークがわかりやすく「見える化」され、評価されています。その他、公共交通やナイトライフの質、本屋の数、コーヒーショップの数といったもので指標付けがされている点が興味深い点です

(図表 3)



世界には、例えばメルボルンであれば「フェデレーション・スクエア」、ニューヨークであれば「タイムズ・スクエア」など、その都市を代表する様々な屋外の公共空間があります(図表 4)。それが熊本にとっては一体どんな場所なのか、またそういったものがなければどのようにつくっていくのか、といったことを考えながら、様々な街の屋外公共空間から都市を考えるということに取り組むとよいのではないかと思います。

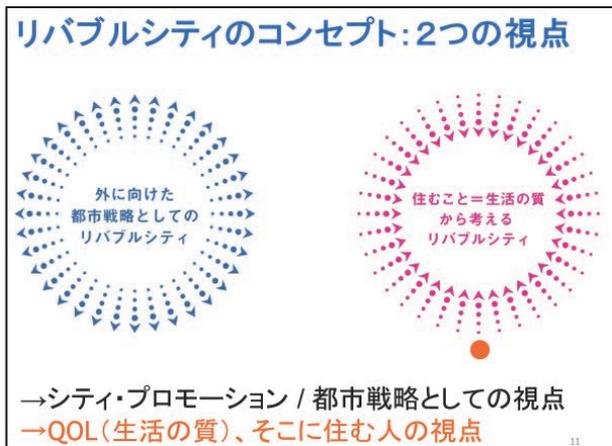
(図表 4)



都市を考える時、市長や市の幹部は、世界の他都市に向けて自分たちの都市をアピールする観光政策やブランディングといった戦略付けをし、外向けに一生懸命頑張ります。しかし実体験として、観光客はその町にしかないものであるとか、その町に住んでいる面白い人、その街にしかないユニークなビジネスやデザイン、プロダクトなどに興味を抱きます。世界中どここの町へ行っても同じフランチャイズの店やレストランなどがありますが、その場所にしかない魅力は生活する人から生み出されます。「リバブルシティ」とは何か、というのは少し難しい課題ではありますが、外に向けた戦略付けとそこに生

活する人の間に住みやすい都市の鍵があるのではないかと考えています（図表 5）。

（図表 5）



「リバブルシティ」をどのように考えていったらいいのかということで、例えば健康的な都市、他にも安心安全、文化的、社会的、歴史的、生態的な都市など様々な指標があります（図表 6）。

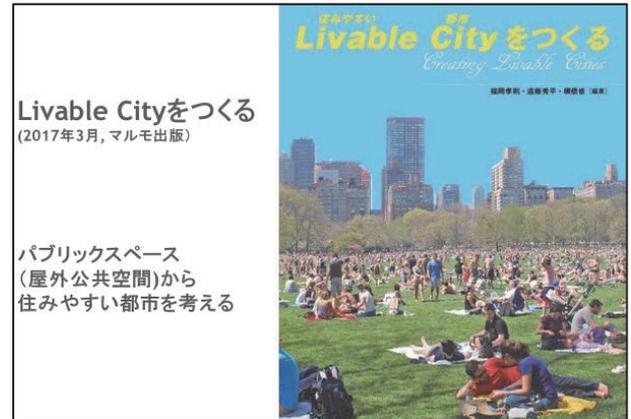
（図表 6）



これを一つに絞り込んでということではなく、20%くらいは健康的なイメージとみどりが基調となつてとか、ここは 50%くらい重要性があるとか重み付けをしていくことがビジョンを作る上では大事だと考えています。

『Livable City をつくる』（マルモ出版）は事例やリバブルシティに資する様々な屋外公共空間のプロジェクトなどへのインタビューを集めて一冊の本にしたものですので参考にして頂ければと思います（図表 7）。

（図表 7）



2. パブリックスペース

(Public Space for Liveable City)

次に、パブリックスペース、オープンスペース、といった屋外の公共空間が私たちの都市の生活の住みやすさにどのように寄与できるのかについてお話ししていきます。私自身は、これからの時代の都市の魅力というのは、どんな立派な建物が建っているかとか、立派な橋があるかではなく、都市の屋外空間こそが住みやすい健康的な生活を送るための鍵になると思っています。毎日の生活の中で、ちょっとした自然や余白の中での軽い運動や、人々との出会いといったような、屋外空間の魅力を高められるかが、ランドスケープアーキテクトである私たち、屋外空間を設計する者の使命だと思っています。都市には様々な屋外公共空間があります。例えば、写真 1 は神戸市の東遊園地という都市公園です。

（写真 1）



写真 2 は、リヨン市のウォーターフロントです。ただ川が流れているだけではなく、そこには散歩する人がいて、木陰で川の水面をゆっくり眺められるような場所があり、おしゃべりをしたり、ゆっくり本を読んで過ごすこともできます。

写真 3 は、集合住宅の中庭です。中庭は公共空間ではなく半公共空間かもしれませんが、子供が遊んだり、毎日散歩したり、ここで野菜を育てたりとそうした生活に近いところにある小さなオープンスペースです。

写真 4 は、「大手町の森」といって、地下に駐車場が入っている人工地盤上の森です。ここに本当に小さいベンチが何基かあるのですが、昼休みになると人が殺到し、場所取りをするような光景に出くわしたことがあります。都市の中で働くということは非常にストレスが高いものです。こうした空間を働く場所の近くに用意していくことが、長期的には魅力的な人材の獲得や、生産効率の向上につながり、新しく創造的に考えることができる環境を作るなど、オフィスの環境も変わることが予測されています。

(写真 2)



(写真 3)



(写真 4)



写真 5 は、メルボルン市内の歩行者空間と道路空間で、非常にうまく設計されており、路面電車と車、自転車と歩行者が共存する街路空間となっています。歩行者空間の中には、滞留空間と人の動きが流動的な場所があり、この街の公共交通と人、自転車それから車が良いバランスでこの道を共有しています。これがこれからの道路の姿かもしれません。私の熊本の第一印象は道路の幅が広く、車が中心の街だと感じました。市の中心部や交通のあり方というものも、今後いろいろ考える余地があると思います。写真 6 は、メルボルン市内にある建物の足元の公開空地で、このように屋外空地と建物の低層部にカフェがあり、こうした空間から人々の利活用が滲み出しています。写真 7 は、町田市役所の屋上で、ここは朝から夜まで市民が出入りして、昼食や軽食を取りながら憩えるような空間となっています。

(写真 5)



(写真 6)



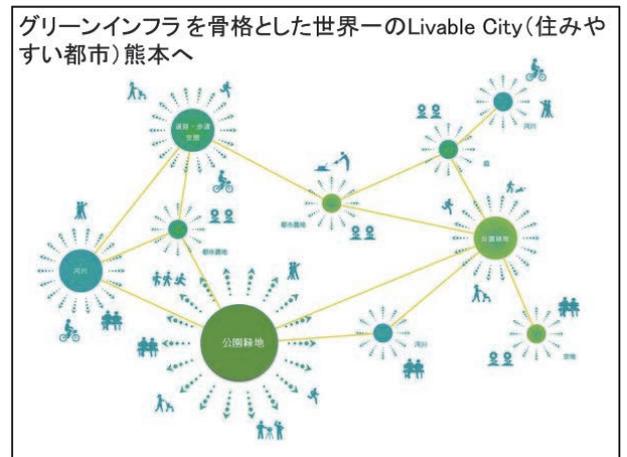
(写真 7)



(写真 8)



(図表 9)



屋外の公共空間というのは、ランドスケープの人も、建築の人も、それから都市計画の人も関われる分野です。そのような事を念頭に、様々な分野で領域横断的に活躍している方達の話をもとめたものが『海外で建築を仕事にする 2 都市・ランドスケープ編』（学芸出版社）です。これは若い学生さんや若手の専門家の方に読んでいただいている本で非常に良い内容となっていますので、こちらもぜひ読んでいただければと思います。

このように屋外の空間はさまざまな形をもちます。セントラルパークや、ボルドーの川辺のように 100 年、200 年と長く続くような魅力的な屋外空間もあれば、1 週間、1 年だけの高架下の空間や、非常に小さい暫定的なパブリックスペースというものもあります（写真 8）。こうした空間の一つ一つは非常に小さい場所ですが、そうした空間を活かし上手く連関させ都市の骨格とすることで、世界一住みやすい都市熊本へとつながるのではないかと考えています（図表 9）。

図表 10 は、熊本市議会の「森の都」都市宣言に関する決議です。今回熊本での講演に際し、緑の基本計画などを読ませて頂いた中で、最初に目に留まったのがこの文書でした。ここに「市民の総力を結集して緑と水の保全回復に努め、もって人間優先の快適な都市環境づくりに邁進せんことを誓い、我が熊本市を森の都とする」と宣言されています。昭和 47 年に、この「森の都」宣言が決議されてから、今熊本市でどんなことが起きているのかをおぼろげながら頭の中に入れつつ、考えてみましょう。

図表 11 のように、都市計画など大きいスケールで、どのように都市の緑地やオープンスペースを考えていくかという戦略を立てる時に、例えば熊本だと緑の基本計画では、二重の緑の輪の中に熊本があり、その中に白川が流れていて、水と緑が豊かな都市だといった都市の骨格を抽象的に表したものがあります。同時に例えば江津湖ですが、夏の江津湖の冷たい湧水の中で沢山の子供たちが遊んでるような場所の体験や、花畑広場では様々なイベントや実験が繰り返されていると聞きます。こうした

多様なスケールの屋外空間をどのようにつなげていくかが私自身の常日頃の疑問点でもあるわけです。

(図表 10)

「森の都」都市宣言に関する決議

自然環境の回復による生活環境の保全は、今や人類共通の課題となっている。由来、わが熊本市は、豊かな緑、清冽な水に恵まれた自然の下、今日の発展を遂げてきたが、急激な都市化の波に、今や昔日の面影は一変しようとしている。

ここにおいてわれわれは、市民の総力を結集して緑と水の保全・回復につとめ、もって人間優先の快適な都市環境づくりに邁進せんことを誓い、わが熊本市を「森の都」とすることを宣言する。

昭和47年10月2日 熊本市議会

(図表 11)

都市スケールの戦略
 グリーンインフラの骨格づくり (トップダウン)
 ・マスタープラン、土地利用計画、都市施設計画など上位計画でグリーンインフラを位置づけ
 →防災・減災、環境性能、社会的課題、交通、都市基盤・公共施設のマネジメントなど

↓

場所・敷地スケールから展開し、積み上げるプレイスメイキング (ボトムアップ)
 ・公有緑地の再編集・再整備、民有緑地、空地、農地、学校、コミュニティ
 →プレイスメイキングの体系化、社会関係資本力(レジリエンス性)の強化

これを言い換えますと図表 12 の上半分に都市スケールの戦略や、グリーンインフラの骨格作りと書いていますが、行政として、もしくは市長のトップダウンで「森の都」を本当に作るのであれば、マスタープランや総合計画、それから上位計画の中で、どのようにしてこの緑や緑地、グリーンインフラというものを位置づけていくかが非常に重要だと思います。近年このグリーンインフラも上位計画の中、特に防災減災や下水道行政の中での位置付けが始まっています。同時にこうした計画は、市民にとってはほとんど理解できないものですが、場所や敷地のスケールから展開して積み上げるプレイスメイキングの、一つ一つの小さい場所を通してならば市民やそこで生活する人が体感できるのです。例えば、公有緑地の質を高め、小さい空地や農地、学校の周りの空間、そうした空間がもう少し体系化されることで、そこに関わる人たちも沢山いるわけですから、社会関係資本力の向上や、コミュニティの力を上げるということに繋がり、ひ

いては非常時に大きな力を発揮することに繋がると思っています。こうした二つのギャップをどのように捉えるかについて、ぜひ今日考えていただきたいと思います。

(図表 12)

都市スケールの戦略

場所・敷地スケールの展開

「森の都」の社会実装?

3. パブリックスペースを核に都市を再編集・再整備 -南町田拠点創出まちづくり-

今日は私自身が関わってきたプロジェクトを中心に話をします。まず、比較的規模が大きいオープンスペースを核とした都市の再編集、再整備のプロジェクトで、東京都町田市にある「南町田拠点創出まちづくり」というものです(図表 13)。東急電鉄によって田園都市構想の下に作られた田園都市線の終点から 2 番目の駅が南町田駅で、駅前のグランベリーモールという商業施設と鶴間公園の一体的再整備プロジェクトです。鶴間公園は町田市にある既存の運動公園(約 6ha)です。隣接する境川は非常に脆弱で、沢山雨が降るとすぐに水位が上昇するのが課題です。新しく建設する地下調整池の上部を都市公園に組み込み、約 7ha の運動公園として再整備しました。一方、商業施設は約 6ha で、鶴間公園と商業施設の間にあった道路を廃道にし、その土地利用を住宅地に変え、その上では民設民営でスノーピー美術館を誘致しました。ここでは、教育委員会や子育て支援の部局が関わり、民設民営で子育て支援関連施設を建て、子どもの英語の教育プログラムや、子どもたちの活動の場を同時につくる構想を進めています。民間企業の力も活かしつつ、公益性を高めるということを目指しています。

(図表 13)



こうしたプロジェクトは前例がなかったのですが、私自身もこの公園の基本計画、基本設計から実施設計監修と、商業施設は構想から実施設計まで関わっていましたので、両方のプロジェクトを一体的に考えるという機会に恵まれました。このプロジェクトは、とにかく真真中に新たな鶴間公園を据え、地域の価値を上げる、地域の魅力を高めるためにオープンスペースを起点にして考えようということを一息懸命やってきました。

それから物理的に商業施設も公園と繋がりますので、公園とショッピングモールが一体的になった時にどんな効果がつくれるのかということコンセプトとして毎回毎回考えていきました。コンセプトとしては、町田は東京でも少し郊外にあり、斜面林が残り、周りには沢山農地が残存していますが、そこに住んでる人はほとんどそのありがたみを感じていないといいますか、豊かすぎるだけに自然に対してあまり興味のない人がいるといった町です。多摩丘陵の自然をどのように取り込むかということ、運動公園では、それまでのサッカー競技場と野球の練習場、テニスコートなどの競技スポーツ施設以外は、あまり使われていなかった状況から、もう少し多機能化し、誰もがいろいろな健康活動に勤しんでいけるような空間に変えるということを計画の中で進めていきました。

図表 14 で示した「アクティブ・インクルーシブ」というのは、誰もが健康になることを謳った新しいデザインの手法で、どんな人もここで健康やスポーツに勤しめるということです。駅から徒歩 5 分圏内にこれだけの規模の公園があるのは都心では珍しいので、パークライフを考えていくこともコンセプトにしていきました。

(図表 14)



この公園は開園して約 40 年経っており、斜面の多くが踏圧により裸地化し、雨が降ると表土の流出がおきていました。既存の樹木や芝生広場などを活かし、地形広場を創出したり（図表 15）、ケヤキ並木の魅力を生かして滞留空間を付加したり（図表 16）と、こうした屋外公共空間の再編集を通して、魅力を生み出していきました。

(図表 15)



また公園の中には、かつての二次林、里山のような樹林が大きく育ってしまったものがありましたが、その間を編集し、もう少し光が入って豊かな植物が育つようにしたり、最低限のアクセスができ、ここでトレイルランができたり、小さい森の遊び場をつくったりしています（図表 17）。ここは運動公園ですから、もちろん多目的の広場があり、その周りに約数百mのトラックを作り、夜も安心して女性もジョギングやウォーキングができる空間にしています（図表 18）。ほとんどの市民にとっては、競技スポーツより歩くことや軽く走ること一番ニーズがあります。ただ街の中でそれをやろうと思うと、魅力的な場所は中々ありませんので、そうした空間をつくっています。図表 19 は、調整池上の多目的スポーツ広場で

すが、その周りにも回遊性を出し、ジョギングや運動前のアップをするような空間を設けています。

(図表 16)



(図表 17)



一つの目的だけでなく、その目的×αで何かできることがある場所を作ろうとすることで公園の中にも自然と賑わいができると思っています。

公園計画の中で、非常に難航したのは市民の合意形成でした。市の公園計画の進め方に疑問を持つ市民の方も多く、今までずっとブラックボックスで情報も開示されず、ただ商業施設ができるので木が何本も伐採されるということに対し非常に多くの疑問の声がありました。実際に伐採する木もありましたが、具体的にどの木をどのように切るのか、もしくはどのように木を残すかいうことを、現場で歩きながら市民の皆さんと見ました。実際に森の生態系に詳しい専門家にも一緒に来ていただき、森というのは、ただずっと放置して人間の手を入れないのは良くなく、時々伐って更新し、光を入れるなど、そのようにして生きている仕組みであることを説明し、その中で将来の樹林の性格づけなど、だんだんと皆さんと考えを一緒に固めていきました(図表 20)。

(図表 18)



(図表 19)



それから、ここは運動公園ですので、どのような新しい運動やスポーツが導入できるか公園を作る前に市民の皆さんに実際に体験して頂きました(図表 21)。ノルディックウォークというのは、ストックを補助的に使った歩行運動です。他にも公園でヨガを実際に体験する中で場所のあり方を想像したり、共有する現場体験型のワークショップを何回かに分けて実施しました。ワークショップというと通常、行政は近隣の自治会や町会に声をかけ、限られた人を集めてワークショップを開催するケースが多いです。市民意見はそれで集約したと整理したり、パブリックコメントを短期間に実施するだけで「意見を聞きました」とします。公園の計画や設計の面白いところ、難しいところは、市民は本当に多様な意見を持っているということです。公園の計画・設計プロセスをオープンにすることで私たち自身も非常に勉強になりました。

(図表 20)



(図表 21)



(図表 22)



公園の中で子どものアート教室や、地場の野菜でピザの調理、簡単な音楽イベントなどを 7 グループぐらいで行いました。最終日には数百人くらいの来訪者があり、非常に良い雰囲気の中、終わることができました。私は公共空間ができた後に、どのようにして人が毎日の生活の中で関わり続けることができるかは、中々デザインできないと思っています。しかし、予め公共空間を育てる体験を繰り返していく中で、やはり人に継続的に愛される場所を作っていく、編集をするという管理運営の能力は非常に重要だと改めて実感しました。「公園のがっこう祭」ではイベントだけでなく、模型を共有して計画設計の進捗を報告しつつ意見を頂いたり（写真 9）、色々な市民のプレイヤーと出会うこともでき、管理運営の方針を考える意味でも勉強になりました。

(写真 9)



その地域で生活し、公園を使ってる人たちが、普段どのような使い方をしてきたか、公園の再整備にどのようなことを期待して、何を課題と思っているかなど多様な声をできるだけお聞きして、計画条件の一部として反映していくことを強く意識しました。加えて、公園再整備後の管理運営を見据えての戦略も持っていました。通常の公園の管理運営では行政が直轄で管理、もしくは指定管理者が管理運営を担います。公の誰かが管理している場所となると、やはり公園に落ち葉が落ちてると、掃除すると市役所に抗議の電話をする住民もいます。空間は整備されて立派になっても、管理運営でだめになる公園も多くあります。鶴間公園では、どのようにして皆でこの公共空間を育んでいくかみたいなのを話しました。約 2 年前ですが、市民の方達が半年かけて主体的に企画を立てて準備をし、秋に収穫祭的な「公園のがっこう祭」を開催しました（図表 22）。

最終的に、町田市では指定管理を 10 年間に設定しています。新しく公園として整備した部分には、公設民営で管理施設、カフェや、多目的スタジオなどを木質構造で合築する計画で現在建設中です。こうした将来の公園の管理運営の大枠や仕組みにまで踏み込んで計画・設計時

に議論を深められたのは非常に良かったと思います。計画設計時から管理運営のあり方も一体的に議論しておくのは今後必要になるでしょう。

同じような形のプレイスメイキングに他自治体でも関わってきましたが、場所によって地域や人の性格も違います。そこに住む人、使う人の気持ち活かせて公園を育てる動きにつなげられないか、を日々模索しています。

4. 民間企業がつくり育てる都市のセミ・パブリックスペース -コートヤードHIROO-

公園や緑地というと民間企業の方や、地元経済界の方は公共の空間だし、自分たちにはあまり関係ないと思われるかと思います。しかしながら、民間企業こそオープンスペースをつくることに積極的に関わるべきです。私が設計者として関わった事例をご紹介します。写真12は、東京都港区にある旧厚生省公務員宿舎で、クライアントは不動産会社、いわゆるディベロッパーで土地と建物を持っています。駐車場と築43年の当時としては頑丈に作られたRC造の建物で、構造強度が高いということで、この建物を生かして何か新しいリノベーションのモデルを作りたいと、建築家を通じて相談がありました。

写真10は、当初の敷地の写真で、駐車場、屋根付きの駐輪場があり、あとは鬱蒼と樹木が茂っていて、荒廃した状態でした。しかし、初めてこの場所に立ったとき、こういう場所にできるんじゃないかという、ひらめきのようなものを強く感じました。この建物は、南向きに配置されているのですが、バルコニーと屋外空間のあいだに大きな分断感があり、どのようにこの1階部分を屋外に対してひらけるのか、というのが一つの課題として上がってきました。プロジェクト構想段階で施主や将来この建物に入るテナントのオーナーなどと話し合いながら、ここで健康やアウトドアなど屋外で体を動かすことをビジネスにできないかということをお話ししました。「それはすごくいいですね、まだ誰もやったことがないのでぜひやりましょう」という事になりました。

(写真 10)



例えば屋外のデッキ空間ではヨガの場合何人使えるか?なども検討しています(図表23)。一つの空間に一つの機能を当てはめるのではなく、一つの場所で多様な使い方ができるかをダイアグラムでわかりやすく見せて議論を深めました。健康・スポーツだけではなく、文化・芸術的な活動にも使えるように、夜に映画を見る風景や、屋外空間全体を使ったバーベキューパーティー、敷地全体で様々な人が集まるようなイベントもできるような場所の設えのフォーマットの議論をかなり初期に議論して設定しています。写真11は、改修後オープン当時の写真です。テナントはまだ埋まっていませんが、1年目にまずアウトドアフィットネスということで、芝生の空間を使ってストレッチ、体幹トレーニング、ヨガを行う新しいビジネスを立ち上げました。

(図表 23)



(写真 11)



植栽も元官舎の庭でしたので、夏ミカンの木やソメイヨシノなど魅力的な樹木も沢山生えていました。これを編集し、新しい植物を加えていきました。この場所は、民間がつくるパブリックスペースと記しています。民間の敷地を月に数度ひらき、パブリックスペースをつくりだしています。所有が公共だからパブリックスペースではなく、多くの人に開かれた、オープンでソーシャルな場所をつくることを目指しています。その内の一つが「ファーストフライデー(First Friday)」といって、毎月第1金曜日にこの「コートヤードHIROO」全体を開きます。シェアオフィス、レストラン、ヨガのスタジオなどで働いている人たちがプレイスメイカーとなり、暫定的なパブリックスペースをつくりだします。4月は桜をテーマにしたプログラム、夏は地域の子どもたちも参加する江戸ウィーク、夜のアウトドアキッチンやヨガなど、工夫しながら様々な使い方を多くの人たちにも体験してもらうことを目指しています。

写真 12 は、春のファーストフライデーで、水墨画のアーティストを集め、桜の木の下で即興で桜の絵を描いてもらい音楽を楽しみました。夏のファーストフライデーでは、地域の町会や子育て層の方にお声がけします。小さいプールですが子供は大喜びです。子供たちが走り回っているかわらで大人がお酒を飲みながら楽しむような夏の夜の時間を過ごすことができます(写真 13)。コートヤード HIROO では、このようなプレイスメイキングの取組を 5 年間続け、今年で 6 年目に入ります。今後の課題としては、月に数度のイベントや定番のプログラムだけではなく、「日常を豊かに」していくことです。ここで働き、学び、遊ぶ人たちの日常をより魅力的にするために、屋外空間の使い方やコートヤード HIROO に関わ

る人たちのコミュニケーションのあり方も今考え直しているところです。

(写真 12)



(写真 13)



新しい広場や公園をつくる時に、一生懸命イベントやプログラムを展開して人の賑わいを作らないといけないと思いがちですが、賑わいを作ることが目的になってしまっはいけないと思います。自然と自分たちが、市民の方たちがそこで何かをしたいと思えるような場所でないといけないし、多様な利活用やふるまいを引き出すようなマネジメントが必要ではないかと考えています。

熊本市は公園系の職員が 6 名しかいないから大変だという話も聞いていますが、パブリックスペースは公園課だけが担うものではありません。これから日本中でどんどん土地が空いていきます。工場跡地や空地、現在は道路ですが将来車が減れば、そこはオープンスペースに再生できるかもしれません。そうした場所を 100 年かけて、こういう空間にするんだ！という姿勢も大事ですが、明日から 1 週間だけ公園のように駐車場が使えないか？など、暫定的なプロジェクトや社会実験も現在、日本の中で沢山実施されています。本来公園やオープンスペース

でない場所をどのようにして、小さな場所として実験的に動かしていくかという戦略も、現在の都市には非常に重要な視点だと思っています。

5. ブラウン・フィールドから新しいパブリックスペースへ

(写真 14)

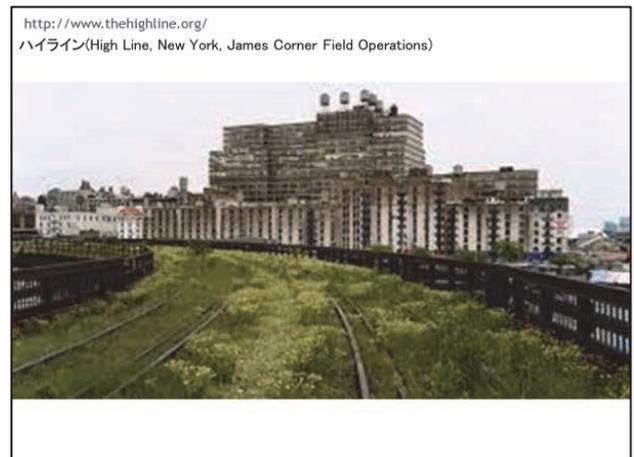


写真 14 は、ニューヨーク市のブロードウェイという道です。元々全て道路だったのですが、当時のブルームバーグ市長の英断で半分を暫定的に舗装を変え、仮想的に動かせる家具類を置き、広場として使用する社会実験を実施しました。道路交通局の辣腕女性ディレクター、サディック・カーン氏がキーパーソンです。暫定的な広場における人の滞留時間や、活動などが丁寧にモニタリングされました。最初は周辺店舗の売上不振などが懸念されていましたが、結果的には車の交通量を減らしてウォークアビリティ（歩きやすさ）を高めたことで、店舗の売り上げが向上しました。人が人を呼び、ここに人が沢山集まり、ここで過ごす時間が増え、滞留時間が増えれば、そこで食べ物を食べるなど落とすお金も増えるというプラスの連鎖がこの場所の成功につながり、最終的にここは本設の広場として整備されるわけです。

写真 15 は、皆さんご存知かもしれませんが、ハイラインというニューヨーク市の高架貨物線の跡を都市公園に再生したものです。私が学生の時はまだ高架跡で、デザイン演習の設計課題になったりしました。ここが現在は年間約 600 万人の観光客や利用者を集める都市公園として再整備されました（写真 16）。この公園は決して幅も広くないのですが、ニューヨークの街を少し高いレベルから空中散歩して眺められるという非常にシンプルな構造になっています。当初はすでにこの高架の撤去は都市

計画決定されており建物が建設される予定でした。それに疑問をもった 2 人の市民が「フレンズ・オブ・ハイライン」という組織を立ち上げ、ロビー活動を続けました。アイディアコンペの実施や展覧会などを通して多くの賛同者を集め、最終的に都市計画決定が覆り、市長や政府の応援、多くの市民からの寄付金などの力で夢が現実となったのです。

(写真 15)



現在も、このフレンズ・オブ・ハイラインという組織が、この公園の管理運営をしていますが大変な黒字です。中には、キッチンカーより小さい、日本でいうところの人力車みたいなものでコーヒーを出したり、お土産屋や軽食を食べるところがあります。それから少額の寄付もできるようになっています。ですから、大変沢山のお金が集まって、ここの公園の経営は非常に健全です。アメリカの場合はセントラルパークやハイラインのように非常に儲けている公園と、全然稼げない公園の格差が問題になってはいますが、このハイラインは一つの良い事例だといえるでしょう。

(写真 16)



アメリカ・デトロイト市には、「ダウンタウン・デトロイト・パートナーシップ」という、その土地の所有者たちが自分たちで会費を集め組織した民間のエリアマネジメント組織(BIZ)があります。このダウンタウン・デトロイト・パートナーシップの事業の一つに、夏の間だけ、駐車場と使われていない道路空間を利活用する「サマー・ストリート」というものがあります(写真 17)。舗装に簡単なペイントを施し、子どもたちがバスケットボールをできるスペースを保険会社がスポンサーとなり運営しています。デトロイト市の街中には元々あまり人がいなかったのですが、このように夏の間だけ場所を開くことを民間企業がサポートしているという事例です。

(写真 17)



写真 18 は、すでに街の中にある公園の敷地に暫定的に砂場を作った「BEACH PARTY」というプログラムです。家具は全部イケア (IKEA) という家具会社が協賛・提供し、奥にコンテナを使ったレストランやバーがあります。親がくつろいでいる間に子ども達は砂場で遊べるような空間になっています。

(写真 18)



写真 19 は、ニューヨークのチェースマンハッタン銀行が、自社ビルの 1 階と公開空地を自主的に改修した事例です。建物は日本の企業の社屋のロビーのように重厚な石の階段と大理石のエレベーターホール、人が誰もおらず使いにくい空間だったのを改修し、いくつかのレベルで町の人がかくつろげる滞留空間や、オフィスの人がここに降りてきて働くことのできる場所を作りました。魅力的な場所ができると、オフィスからも沢山人が降りてきて、様々な活動が表出しはじめます。これは銀行が自主的にパブリックな場所を創出することで、地域の魅力を高めたり、それから楽しい働き方を模索する姿勢を表現しています。同時に、銀行の価値をブランディングしているともいえるでしょう。時折ここで寝ている人や少し怪しい人がいる場合もありますが、開くことでまちや、より多様な人々とのつながりが期待できるのも建物の低層階や屋外空間の魅力かと思います。日本のほとんどの企業は建物の中に閉じこもっていますが。

写真 20 は、様々な形をもつ暫定的なパブリックスペースです。左上の写真は今後再開発が起きる予定の場所で、広場的な空間を創出し、開発の前から人々に使ってもらおうと整備されたオープンスペースです。

右の写真は「パークレット」というもので、道路上の縦列駐車空間が無駄なので、その空間を夏の間だけ公園のように暫定利用するものです。店舗主たちが何店舗かで組合を作り、パークレット整備の申請を行います。行政側はこの場所の占有料を徴収し、初期投資の一部を負担しますが、維持管理は店舗側が担います。パークレットにより売上げが上がる店舗は取り組みを継続し、事故が起きたり効果がないところは撤退しています。このように、行政の道路局の中で、パークレットがしっかりと施策化できており、新しい動きは着実に展開されています。左下の写真は、「サマー・ストリート」といって夏の間だけ道路を子どもに開放するプログラムです。ニューヨーク市の職員が南米のコロンビアでこのように道が人が使っているのを見て真似をして始めたということです。

(写真 19)



(写真 20)



(図表 24)



6. 都市の骨格を創り変えるグリーンインフラ

ようやく、ここから都市の骨格をつくりかえるグリーンインフラについて話をしていきたいと思います。「グリーンインフラ」という言葉には様々な定義や考え方がありますが、私は自然が持っている多様な機能を賢く生かして社会資本整備や国土管理を行う考え方だと思っています。すでに日本の都市は完成していますが、その土地が本来持っている地域資源を活かして、一つの場所で防災減災、微気象の緩和、雨水の管理や生物多様性の向上、健康増進、不動産的価値の向上などの目標の達成を目指すものです(図表 25)。

(図表 25)

グリーンインフラとは何か？

- ・グリーンインフラとは(GI=Green Infrastructure)は自然のもつ多様な機能を賢く活かして、持続可能な社会資本整備や国土管理を行う考え方
- ・既存の都市・地域の自然・環境資源を活かし、重ね合わせるように多様な機能を引き出す社会資本整備を行うことで、防災・減災、微気象の緩和、持続的雨水管理、生物多様性の向上、食料生産、健康増進、不動産価値の向上など一つの場所で複数の目的を達成可能な取り組み
- ・都市計画・緑地計画・ランドスケープ・環境学・生態学・防災減災など、多領域間の学際的な協働を促し、行政(土木・河川・下水道・道路交通・都市計画・公園)、民間、市民の多様な主体の協働が特徴

グリーンインフラは公園緑地課だけではなく、都市計画や下水道、河川、農政、防災など様々な部局に関連するテーマです。グリーンインフラに関する施策・計画や社会実装の検討は、現在様々な自治体で進行中です。日本におけるグリーンインフラの展開ですが、国レベルでは2015年に国土形成計画、それから第四次社会資本整備重点計画の中で「グリーンインフラ」という文言が入りました(図表 26)。これは当時、環境省から国土交通省に出向していた人が頑張って入れたのですが、その人達を中心に私たちは一緒にグリーンインフラ研究会を組織し、グリーンインフラというものが、国の政策としても重要度が増しています。同時に現在は、グリーンインフラ社会実装に向けた取り組みが基礎自治体レベルや民間で進んでいます。

(図表 26)

グリーンインフラ 日本国内での展開の一部

国レベル

- ・国土形成計画、第4次社会資本整備重点計画、質の高いインフラ投資推進のためのG7伊勢志摩原則ほか

基礎自治体レベル

- ・横浜市中期4か年計画(2018-2021)
- ・横浜市下水道事業中期経営計画(2018-2021)
- ・横浜市旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会基本構想案(2018)
- ・世田谷区豪雨対策行動計画(2018-2021)
- ・守谷市グリーンインフラ推進に関する包括連携協定(2018)

出版物

決定版!グリーンインフラ (日経BP社ほか)

横浜市では、2018 年に策定された上位計画である中期 4 ヶ年計画や下水道の事業中期計画の中に、グリーンインフラを位置付けています。ここには「グレーインフラ」といわれる下水道などグレーの構造物を補完する形で、グリーンインフラがどのように機能するかということが書かれています。熊本市では近い将来に都市緑化フェアが開催されますが、横浜市でも米軍の旧上瀬谷通信施設の跡地で国際園芸博覧会の構想があり、基本構想の中に従来型のインフラ整備でなくグリーンインフラを活かしたまちの骨格を作るという考え方が入っています。私自身が関わっているものには東京都世田谷区の豪雨対策行動計画があります。東京都では 23 区内の脆弱地域で、重点的な改善地域かが決められています。世田谷区では土木課が中心となり、従来型の透水管や地下の貯留施設、調整池などのグレーインフラの整備に加えて、緑地や地上のオープンスペースを使って、それを流域対策にしていくことを明言化したものです。

また茨城県守谷市では、緑や農地が元々多く残っている自治体なので、市長直轄でグリーンインフラの対策室を作り、1 年かけて多部署の職位と協定を結んだコンサルが共同でグリーンインフラのあり方に関する研究会を進めつつ、小さな社会実装も進めているようです。

グリーンインフラというと、どうしても水が浄化される、植物の蒸発散によって都市が冷やされる、生物が増えるなどの「環境的な便益」が強調されます。これは勿論非常に重要な事ですが、「経済的な便益」、グリーンインフラを導入することで、どのように不動産価値が上がるのかなど、それから「社会的便益」の三つの便益が重要になります(図表 27)。昨年度、日本政策投資銀行と、このような価値をどう測るかという事を検討しま

したが、定性的な価値をはかるのは非常に難しいということも分かりました。ただ時代は、ESG 投資のような流れが急速に伸びていますので、グリーンインフラの環境的・経済的・社会的な便益をはかり、位置付けることがますます重要になります。

(図表 27)

グリーンインフラによる便益

- ・環境的な便益
(低炭素化、大気質の向上、レクリエーション、効率的な土地利用、健康増進、洪水等水災害からの防御、水源の保全、地下水の涵養、野生生物棲息地の保全、表面流出水の削減等)
- ・経済的な便益
(ハード施設を中心とするグリーンインフラ建設コストの削減、更新期にあるインフラの維持管理、不動産価値の向上、経済・開発の促進、エネルギー使用の削減と効率化等)
- ・社会的便益
(歩行者空間や自転車アクセスの向上、アメニティの高い歩行者空間や屋上空間を創出し、リハビリティの向上や都市緑地の質の向上、持続的雨水管理の市民向け啓蒙・教育、都市のヒートアイランド化の抑制)などがあげられる。

グリーンインフラの対象空間ですが、公園緑地や屋上緑地だけでなく、都市の中の例えば河川や道路、歩行者空間も対象空間になります(図表 28)。

事例として、アメリカで最も住みやすい街といわれているポートランド市の中で、まちの骨格を調べているグリーンインフラについて紹介したいと思います。写真 21 の右下の写真は、ポートランド市の市職員の駐車場です。写真の通り、車での通勤者はほとんどおらず職員の多くは自転車通勤です。ポートランド市では道路の使われ方が変わってきており、路面電車(LRT)と自転車道の整備、歩道の拡幅に合わせて、道路局と下水道局の財源でグリーンインフラの整備を推進してきました。

(図表 28)

グリーンインフラ適用策が展開される都市空間

成熟した都市環境に重ね合わせ、多機能・多便益を引き出す骨組み

(写真 21)



通常、日本の建築基準法では降った雨水はできるだけ早く管につなげて流すこととしていますが、グリーンインフラの考え方はそうではなく、雨樋を非接続して雨の庭に流したり、歩行者空間と一体的に、掘り込んだグリーンストリート（緑溝）をつくり、一時的に雨水の貯留や浸透を促しています。

写真 22 の空間を写真 23 のように改修したのですが、歩行者空間の雨水が 7~80 センチ掘り下げた緑溝の中に一次的に貯留浸透され、そのオーバーフローがまた次のプランターに流れ、最終的に三つ目のプランターからのオーバーフローが下水道に流れるという仕組みです。豪雨の際に水が流出するタイミングを遅延させることができるのと、一時的な雨水流出抑制ができるのです。ここでは道路の水もプランターに入れており日本では難しいと思いますが、植えられた植物は耐水性があり、1 回雨が降ると少しぐったりしますが、24 時間以内には水が抜ける設計になっており、植栽もまた元の状態に戻ります。駐車場でもこのような改修を行い、できるだけその敷地に降った雨水を地中に染み込ませ貯留浸透を促進させるようにしています。

(写真 22)



(写真 23)



初期の頃は写真 24 のように通常の雨樋をはずして、庭に雨水を流すという事をやっています。少し見えにくいですが、これは川を遡上する鮭をモチーフにしたアート・プロジェクトです。単に環境のためにグリーンインフラをつくりましょう！といっても中々人はついてきませんので、楽しく、小さい予算でこういうことをどんどんやっっていこうと市が始めましたそうです。

写真 25 は、公園の中にお椀状の空間があり、周辺の街路で集められた雨水を、一時的に貯留・浸透する生態滞留池です。ここに在来種を基調とした植栽が施されていて、雨の時はこれが遊水池として機能しますが、通常時は緑の空間として使われています。

(写真 24)



(写真 25)



写真 26 は、グリーンストリートといわれるもので、い草類の植栽がされています。年間数度の管理という粗放管理になり、植栽としては単純な構成です。ポートランド市内には 1,600 ヶ所以上で整備されており、グリーンインフラの骨格をつくっています。

その他屋上緑地や道路、歩行者空間の脇のグリーンストリートやレインガーデン（アメリカは歩行者空間の面積が広く、歩道上の雨水を集める小さめの雨の庭を創出）を作っています（写真 27）。持続的雨水管理の一番のポイントは通常、降雨後に雨水は一気に排水溝や雨水管に流れ込み、調整池へと流出しますが、屋上、建物、庭、道路などの空間を賢く使うことで、雨水流出量や流出速度の遅延などが達成されます。同時に、先程お話ししたように新しい価値を生んでいくことも求められるでしょう。ですから、持続的雨水管理のプロセスとみどりの空間を掛け合わせることで、それによって多面的な価値を生むことが課題になります。

(写真 26)



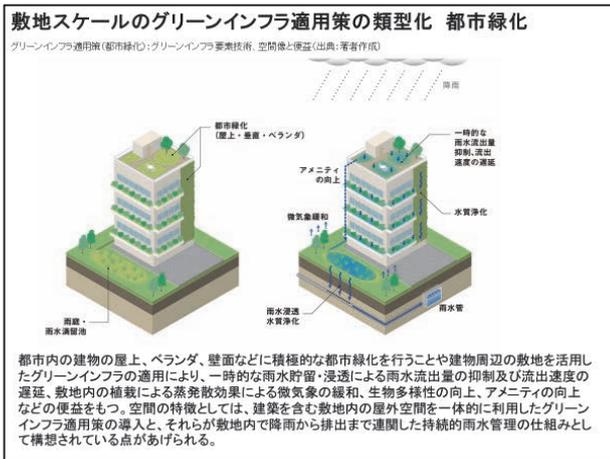
(写真 27)



これから再開発や容積率の緩和を行っていく時に、建物の整備要件の中に、どのようにこのグリーンインフラを取り入れていくかという事が必要です。これからは、ただ容積率を緩和して公開空地の面積や緑量の確保だけではなく、その空間の質や機能をどのように評価することも重要となります（図表 29）。

道路でも街路樹の維持管理だけではなく、道路再編の機会を活かして、植栽帯や歩行者空間における雨水管理と健康的な街路樹の育成を推進することも可能だと思います（図表 30）。

(図表 29)



(図表 30)

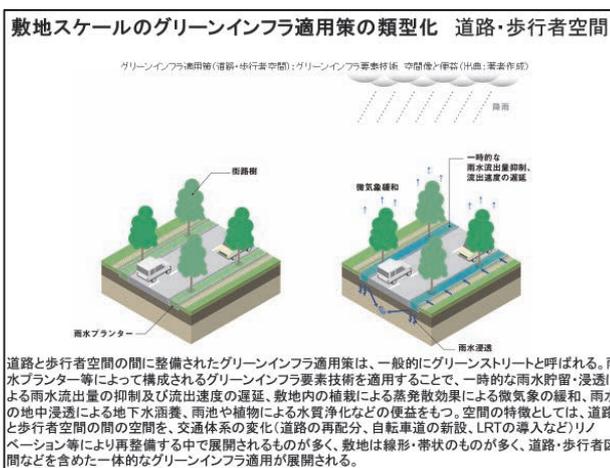


写真 28 は、私が所属していたドイツの事務所に関わっていた、ビシャンパークというシンガポールの都市型河川公園です。元々は河川課が管理する三面張りの排水路のような河川と、公園課が管理する公園が二つに分断されていました。ここではコンクリートの河川から、公園と一体的な氾濫原を内包する都市型河川公園として再整備を行いました。

図表 31 が、断面の比較です。左側が土木の河川標準断面です。右側のように、川幅を広げて、氾濫原として機能を創出すると同時に、自然型の護岸で人々が水に近づけるようにしました。加えて、断面の形態が非常に多様なのがわかると思います。こうして既存の公園と一体的に河川を再整備することで、防災・減災機能を付加し河川公園の誕生となりました。

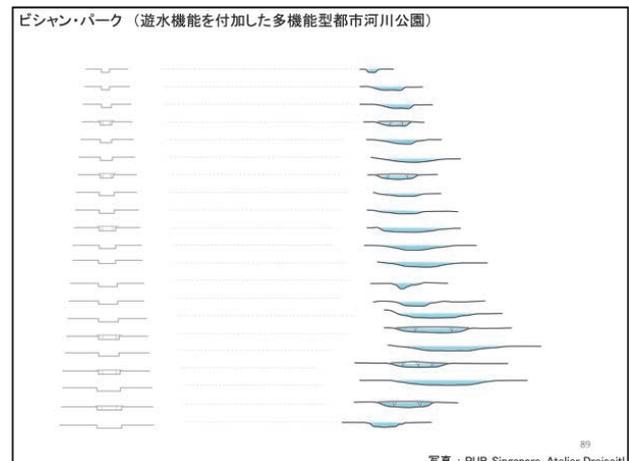
平常時は、多くの子どもたちが川で遊んでいます。シンガポールは日本より降雨量が多く、植物の成長スピードが非常に速いので、生物もすぐ戻ってきます。降雨後は写真 29 のように氾濫した状態になりますが、これも想定内です。水位が上昇するにしたがって、公園の中でオ

レンジ色の照明が点滅し、避難するようにアナウンスがされます。少しずつ水位が上がってきますが、こうした仕組みはドイツ式を導入して、シンガポールではモデルプロジェクトとして展開されています。

(写真 28)



(図表 31)



(写真 33)



この川の水をポンプアップして、水を浄化するような事もしています(図表 32)。日本の棚田のように見えますが、土壌の基盤と植物の力を使って、川の水を浄化しています。この空間は生物棲息域としても機能する浄化バイオトープというものです。

(図表 32)



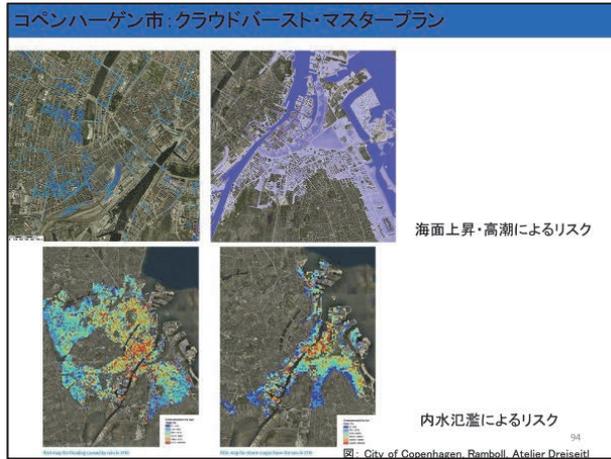
ビシャンパーク整備の結果として、周辺に立地する公営と民間の集合住宅の不動産価値が向上したというデータがあります。構想当時は反対もありましたが、現在はこのようなプロジェクトの建設を望む要望が沢山でいるようです(図表 33)。

(図表 33)



デンマークのコペンハーゲン市では非常に大きなゲリラ豪雨の影響で、街の旧市街地が甚大な水害に見舞われました。図表 34 は、コペンハーゲン市旧市街地の脆弱性を視覚化したものですが、上半分の図が海面上昇による高潮によるリスクで、下半分の図が内水氾濫によるリスクです。海側からも陸側からも脆弱なコペンハーゲン市では「クラウドバースト・マスタープラン」を策定し、豪雨に対する都市計画的な施策を展開しています。クラウドバースト・マスタープランのポイントは、微高地でグリーンインフラを導入する場所を特定している点です。

(図表 34)



内水氾濫に効果の出やすいエリアを選定し、特にその街区や道路、歩行者空間において今後再整備や改修の計画がある場所では積極的に導入が進んでいます。図表 35 にあるように、ここは全て道路でしたが、車も自転車人も水も共有する場所ということで、実験的ではありますがクラウドバーストの社会実装が構想されています。市内では施策の展開と同時に、いくつもモデルプロジェクトが整備されています。コペンハーゲンの旧市街には非常に古い歴史的な建物が建ち並び、オープンスペースを新たに整備できる場所がありません。ですから、道路空間を活用し、歩道は残した上で帯状の緑地(氾濫原)を創出し、一時的な雨水の貯留浸透機能をもつグリーンインフラを整備する予定です。

(図表 35)



7. みどりの場所を共有し育てる-神戸市東遊園地 URBAN PICNIC-

最後に「人」についてお話ししたいと思います。私が神戸に住んでいる時に関わってきた神戸市の東遊園地という公園で行われていることを中心に、人がどのようにオープンスペースに関われるかということをお話ししていきたいと思います。写真30は、6~7年前のゴールデンウィークの非常に天気の良い日の東遊園地の光景です。背後に神戸市役所がそびえたっていますが、この公園が使われていないのはもったいないということで、地元の工務店の社長さんや市民の有志による「URBAN PICNIC（アーバンピクニック）」という社会実験が始まりました（図表36）。元々、東遊園地というのは外国人居住地に隣接しており、彼らの要望によって作られた遊園地で、ここでスポーツをしたりレクリエーションをしたりする場所でした。この公園が再び、周辺で暮らし、働き、学ぶ人たちにとって魅力的なアウトドアリビングになるような、公園を起点に町の価値を高めることを目指しました。最初はグレーの舗装部分だけで社会実験が行われました。

(写真30)



公園内の小さな舗装空間に借りてきた芝を張り、2週間だけカフェやアウトドアライブラリーを開いて、どれだけ人が来るかというのを見ました。驚くべきことに、周辺のマンション住民をはじめ、沢山の人たちが公園に集まるようになったのです。これを見た神戸市長が「これは選挙対策で使える」と思ったのかはわかりませんが、当初あまり協力的でなかった神戸市も、次年度は土のグラウンドの芝生化の実験を遂行しました。土のグラウンドにここに13種類の芝を植えて、踏圧の実験を行うという目的で芝生化の実験を実施したことで、社会実験

の範囲が広がりました。結果として2~3年経つと、市民の方たちが、芝生の上でゆっくり友達と話をしたり、ご飯を食べたり、子供を遊ばせたりという風景が定着するようになります。

(図表36)



写真31は、4年目の2018年の風景です。このような社会実験を展開するために、財源は企業の協賛と市からの受託事業費、助成金を3割ずつになっています。図表37は社会実験開始からのタイムラインですが、社会実験を運営している一般社団法人リバブルシティイニシアティブの自主プログラムがあります。神戸の雰囲気合う食や音楽などのプログラムを実施しています。一番特徴的なのは市民が自分たちで応募し、公園でプログラムを展開する公募プログラムの仕組みです。ウェブサイト上で、何月何日にパークヨガのプログラムを実施したいなど、応募できるようになっています。基本的にはお金は500円以下の材料費しか取れませんが、実に沢山の団体がここで自主プログラム、公募プログラムを実践しています。

(写真31)



(図表 37)

神戸・東遊園地 UPのタイムライン	
・2015年	神戸パークマネジメント社会実験実行委員会と神戸市の共催でUP開催。
・2016年	6月中旬～11月上旬 長期社会実験UP開催（神戸市は芝生化の実験を行う）
・2017年	同時期にUPを開催。 →11種、32回の自主プログラムの企画運営（芝生の演奏会、絵本のタペ、ワインピクニックなど） →16主体による、34回の公募プログラムを実施（パークヨガなど） →76回の育てるプログラムを実施。（公園プログラムの運営補助、チョーク消し、塗装や机づくりなど）→運営側に参加する市民を増やす →フレンズ 27名認定 本の寄贈、育てるプログラムへの参加、ガイドツアーへの参加、東遊園地検定への合格の4点をクリアした市民を認定
・2018年	金・土・日に限定して4回目の社会実験を開始

社会実験を展開する中で、様々な気づきがありました。例えば地元の南京町(中華街)で働いてる方が毎朝公園で太極拳の練習をしていたのですが、公募プログラムに応募して頂き、より多くの市民と体験を共有して頂きました(写真 32)。「公園を市民のステージに」ということです。私達も面白い市民プレイヤーの方たちを探しにいき、プログラムを実施して頂いたりということもありました。

(写真 32)



写真 33 は、私が神戸大学にいたときの学生です。まちの事をやりたいという学生が、この公園でカフェの店員として働き、ある時間は子供と遊んだり、設営準備で椅子を並べたり、それから運営のお手伝いをしたり、1人で何役もこなすようなマネジメント人材として活躍しました。ちなみに彼は不動産会社、彼女は広告代理店に就職しました。学生や若い人の中にはまちの事にに関わりを持ちたいと思っている人は多いと思います。そういう機会を作ってあげることも重要だと思っています。

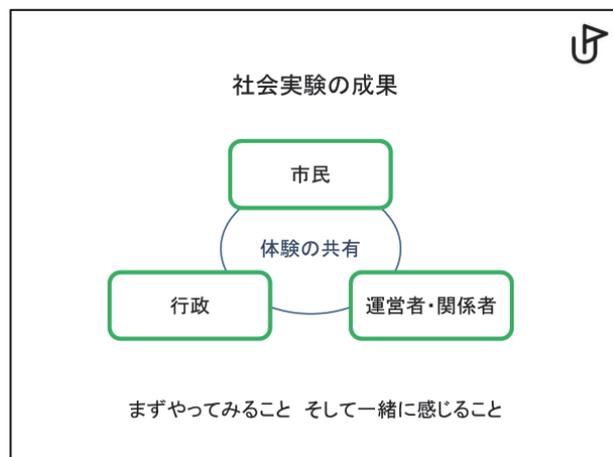
(写真 33)



現在、関西圏の二つの自治体でこの建物がまた違う形でそのまちの公園で再利用され、URBAN PICNIC というイベントやムーブメントが他の場所にも連鎖を生んでいるのは、非常に面白いと思っています。

成果として、市民と行政と運営関係者である私たちがまずこの成功体験をこの場所を通じて共有できたことがあげられます(図表 38)。私達は最終的に公園に賑わいを作りたいのではなく、公園を良くしたいのでもなく、まちの事を良くするために公園を使いたいと考えています。ですから世界一住みやすい都市、メルボルン市の都市計画職員を呼んだ際は公園の中でフォーラムを開き、神戸市の職員や市民と一緒に青空の下で議論を行いました(写真 34)。このような活動を通じて、神戸にとって住みやすさとは何なのか、や神戸という都市に固有な魅力の磨き方についても議論を続けてきました。結果として神戸市の職員のなかにも、実験的な機運が生まれて始めていると感じています。

(図表 38)

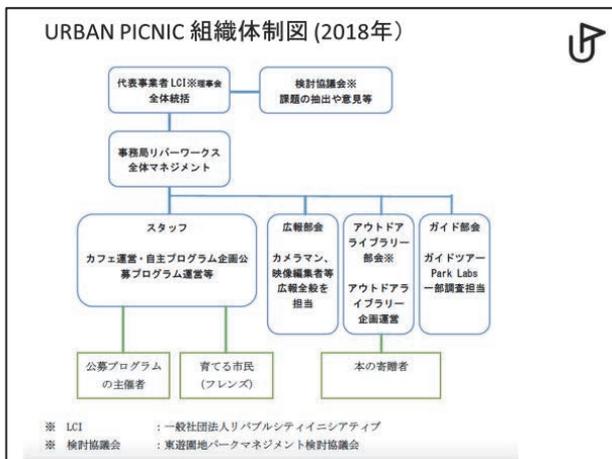


(写真 34)



図表 39 は、URBAN PICNIC という社会実験の組織体制図です。事業者とカフェのスタッフや広報部会、ライブラリーの運営などがありますが、コアで大体 4~50 人の市民の方たちが少しだけ自分たちの時間を使って関わっています。それから公園のファンのような方たちがその周りにおられて、100~200 人の人たちが、何かあると必ず参加して協力してくれます。公園の活動が盛り上がれば盛り上がるほど排他的になる可能性もありますので、いつも違う試みに挑戦したり、新しい市民の参加を促したり試行錯誤しながら取り組んでいます。

(図表 39)



URBAN PICNIC の社会実験の隣では、また別の社会実験が展開されています。神戸市の農政局と協力の、「EAT LOCAL KOBE」というものです。神戸市内で営農する農家さんに参加してもらい、季節が良い 5 月から 10 月の土日にファーマーズマーケットが開催されています (写真 35)。

(写真 35)



通常のファーマーズマーケットは、ただそこで野菜を買って終わりですが、このファーマーズマーケットでは、そこで野菜を買って、調理されたものを食べたり、生産者さんと話すこともできます。また、ファーマーズマーケットを契機に神戸市内の生産者を市民が訪れるような交流も生まれているとのこと。この社会実験は大変成功しており、本設に移行してゆきました。

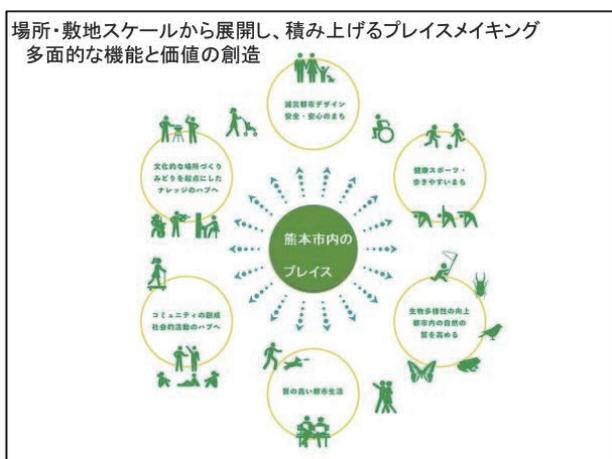
このように使われていない公園やオープンスペースが日本全国に沢山あると思います。そうした場所をどのように市民が関われる場所に変えていくかが大事だと思っています。ここ熊本でも屋外公共空間におけるイベントは沢山行われていると思いますが、消費ではなく、どれだけ多くの市民の人たちが主体的に「森の都」を育てることに関われるかは重要な点だと思います。

8. グリーンインフラを活かした住みやすい都市づくり

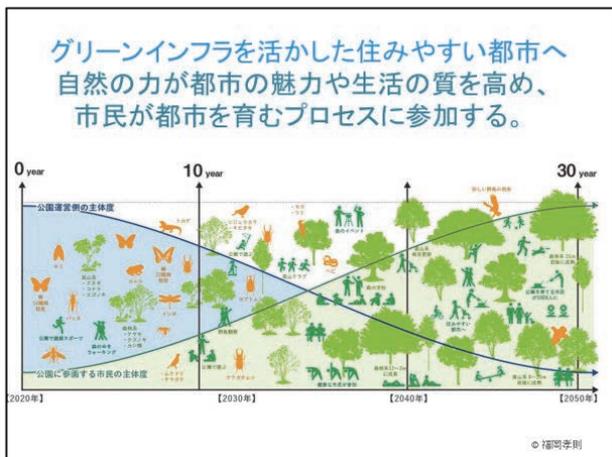
これまでグリーンインフラの話をしてきました。小さい場所やスケールから積み上げる「プレイスメイキング」という話と、都市のグリーンインフラの話は、一見全く異なる話のようにも聞こえるのですが、熊本市内にある多様なポテンシャルを持った場所を活かして、どのような方向に舵取りをしてゆきたいのでしょうか？例えば、歩きやすい町や健康・スポーツなのか、生物多様性なのか、コミュニティを作ることなのか、もしくは文化的な場所なのか、それはその場所が立地する特性によっても違うと思いますし、地域や商店街、町の地区の人たちが持っている力によっても変わると思います (図表 40)。こうした小さい場所から多面的な価値を創出し、積み上げてゆくボトムアップのアプローチを継続することで、図表 41 のように、公園に参加する市民の主体度が上がる

と、公園運営側の主体度がクロスして下がっていくようなことも起こると予想されます。公園やオープンスペースというものはそこに生活する市民誰でも関われるはずですが、なぜか多くの方は公園の管理は行政がやるものだと考えています。木の葉が落ちると苦情を言うような市民を減らすためには、どのようにして、こうした自然＝熊本の「森の都」空間に市民が関わる機会をつくっていくのが非常に重要です。市民が都市を育むプロセスに参加する中で、オープンスペースやみどりの場所をどう活かすかという視点が生まれてくるのではないのでしょうか。これは熊本だけでなく日本中どこの自治体にも共通する課題です。

(図表 40)

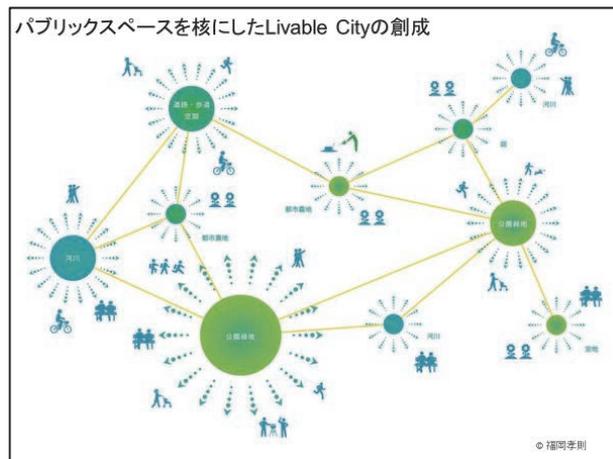


(図表 41)



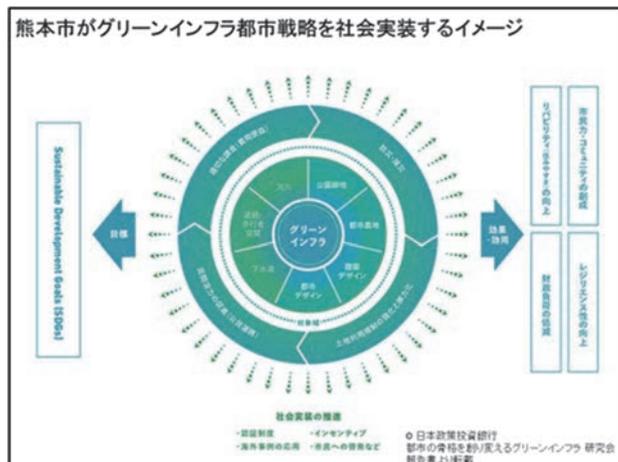
こうした場所を戦略的に起動させることができれば、(熊本では江津湖周辺や熊本城周辺、花畑広場なのかもしれません) うまく屋外公共空間を起点とした市民の活動が連鎖して、都市に変化が起きるかもしれませんし、失敗するかもしれません。まずは少しずつオープンスペースから都市を考える事で、住みやすい都市というものに一歩近づけるのかなと思います(図表 42)。

(図表 42)



同時に、熊本市がトップダウンでグリーンインフラを社会実装する場合、どのようなやり方があるかという事ですが、図表 43 は、昨年度に日本政策投資銀行と共に開催した研究会で作ったアウトプットの 1 つです。例えば、熊本市が持つべき SDG s の目標や、レジリエンスを高める、財政負担を低減、住みやすさを上げるなどの大きな目標に対して公園緑地課、河川課、農政課、建築、都市、下水道、それから市民関係の課、そうした全ての行政職員たちとグリーンインフラ施策や事業を入れ込めるのがこれからの基礎自治体にとっても非常に重要になると予測されます。

(図表 43)



海外の様々な自治体の取組みを見ていますと、例えば米国のフィラデルフィア市では上下水道部局に 300 人ほど職員がいる中で、グリーンインフラを担当しているのは 5 人ほどです。彼らはグリーンインフラの業務を全て自分達で抱えるのではなく、戦略をつくり多部局のグリーンインフラ 事業を展開することを意識しています。企画構想、計画設計技術、施工、管理運営などグリーンインフラの計画から実装までのあらゆる段階で部局間横断

で調整や交渉を進めたり、民間企業の再開発に対して折衝できるような、コミュニケーション能力や交渉・調整力が高く、領域横断思考の強い職員が配されているということです。今日は、下水道や道路、都市計画の部局の方も来られているということですから、グリーンインフラの施策や事業を既存の業務や施策の中に、どのように入れ込めるかを考えると同時に、新しい取り組みを展開できる戦略をもつことが大事です。そうしたグリーンインフラの取り組みが究極的にはどのようにして「森の都」に繋がるのかをぜひ考えていただけたら良いかと思えます。

最後に都市のパブリックオープンスペースというのは市民誰でもアクセスできる場所です、一つ一つの場所が良くなることも勿論大事ですが、その繋がりをグリーンインフラにつなげて、そこに生活する人がその場所を育むことに関われることが住みやすい「森の都」熊本をつくることに繋がるのではないかという言葉で本日の私の講演は終わらせて頂きたいと思えます（図表 44）。本日はご清聴頂きましてありがとうございました。

(図表 44)



